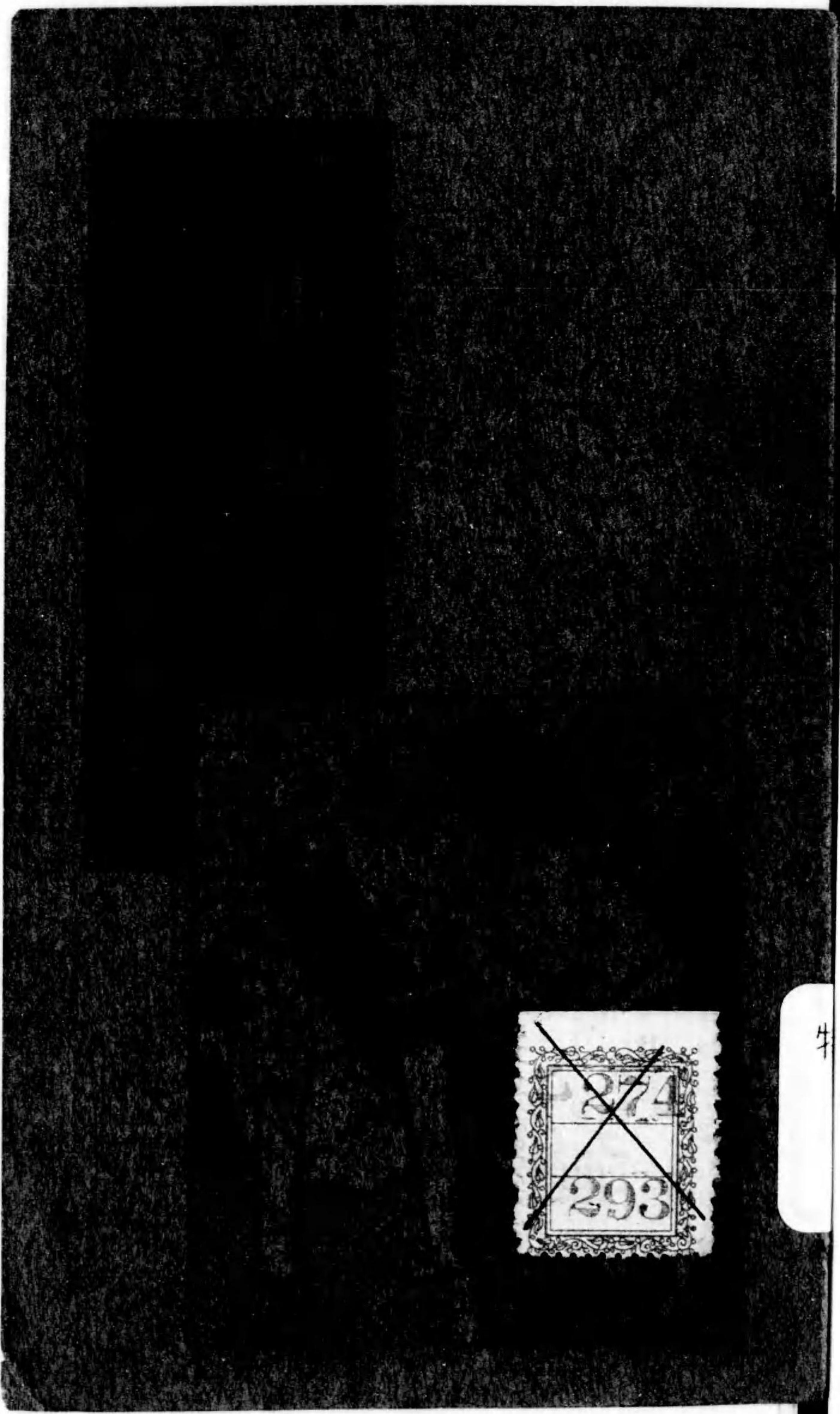


始



牛

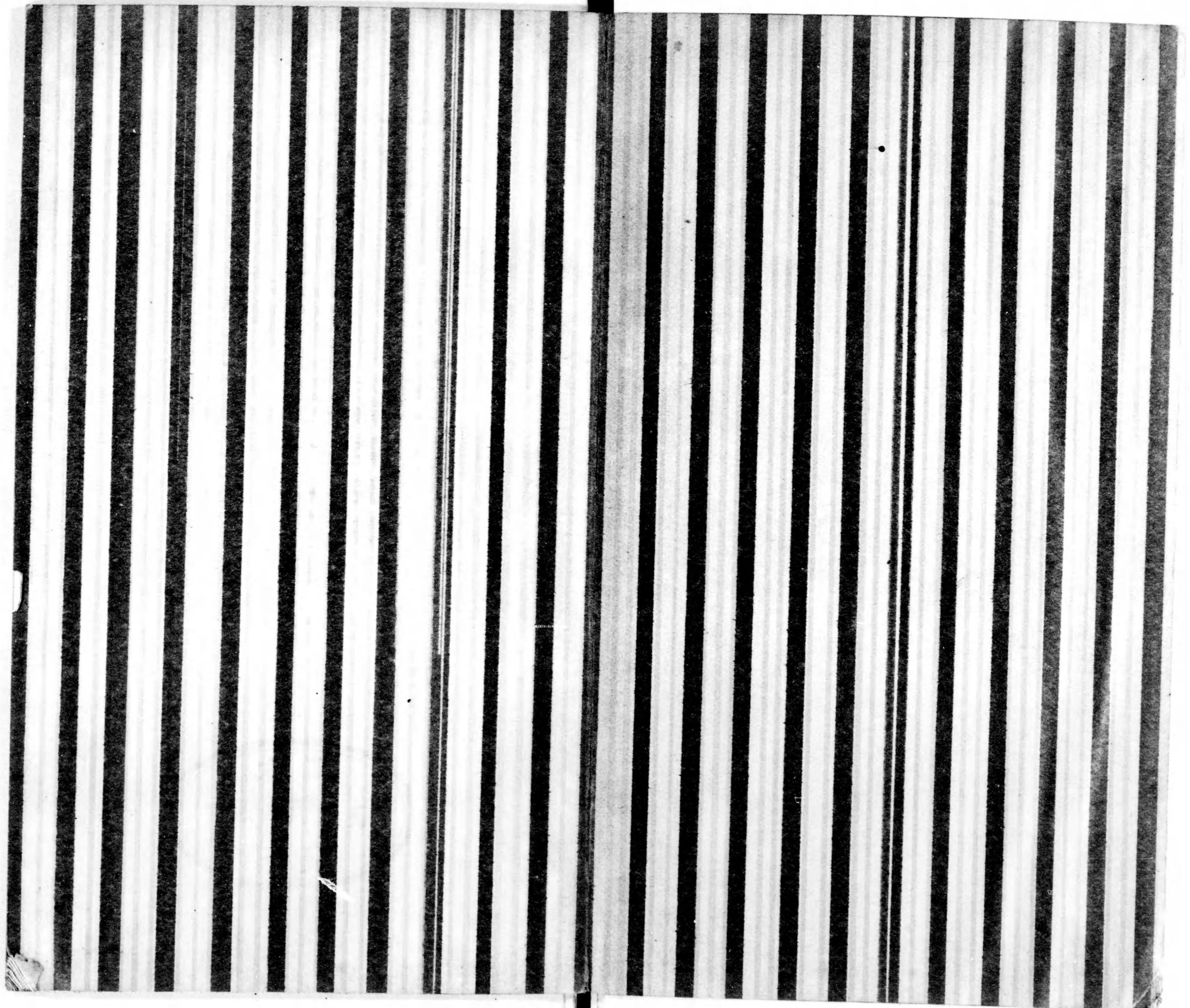


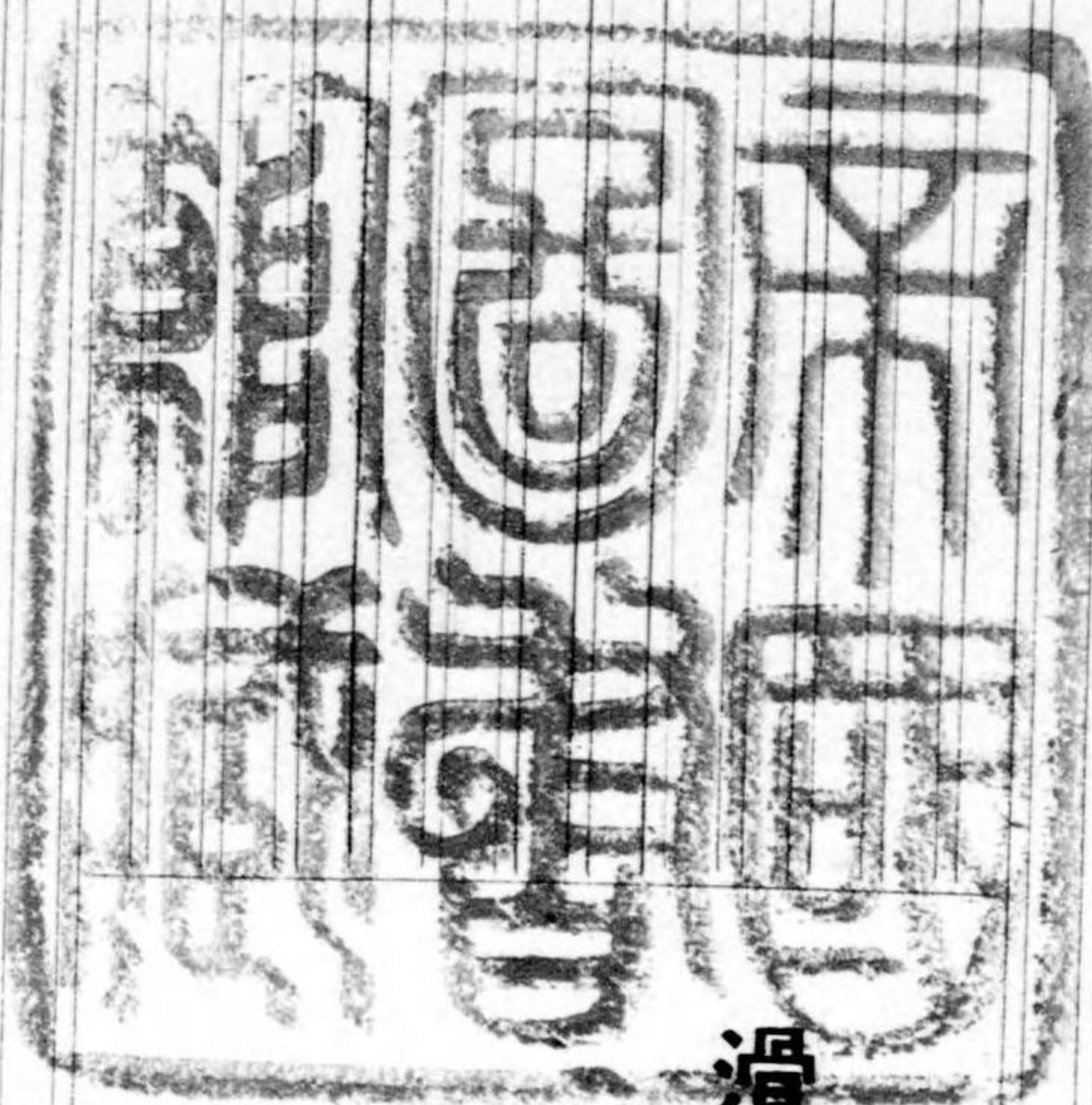
一休和尚

滑稽叢書



+





滑稽叢書

一休和尚

狂禪坊



特 101
588

1 次 目

七	六	五	四	三	二	一
土で捏ねた茶碗大切か	あゝ生如來様生如來様	蓋を除ずにお汁を上れ	嗚呼爾元來生木の如し	二百文で四十雀の引導	極樂淨土へ往て見たい	やんごとなき方の御胤
.....
三三	二八	二三	一七	一二	六	一

目 次

一七 怪しの修験者縮み上る……………八九

一八 御師に借りては押借だ……………九四

一九 心に惚れよ人に惚るな……………一〇〇

二〇 地藏尊の頭上へ大小便……………一〇七

二一 乞食坊主と人は云ふ也……………一一二

二二 子が無いで孫が生るか……………一一八

二三 一國一城の主も大閉口……………一二三

二四 身延山で南無阿彌陀佛……………一二八

二五 牛に曳れて善光寺詣り……………一三四

八 後生をば願ひ過ぎるな……………三九

九 今日(けふ)は三七日(ななつか)だ皆糠(みなぬか)だ……………四四

一〇 大黒天(だいこくてん)の米俵(こめだばら)は無要愼(ぶえうじん)……………五〇

一一 怒れば地獄(ぢごく)笑へば極樂(ごくらく)……………五六

一二 人間の一生(じんげん)は色則(しきそく)是空(ぜくう)……………六一

一三 女病人(をんなびやうにん)を拂子(ほつす)で滅多打(めつたうち)……………六七

一四 白禳(しろたすき)に野晒(のざら)し姿(すがた)で盆踊(ぼんをどり)……………七二

一五 蓮如上(れんじょう)人(にん)コロリと参(まゐ)る……………七八

一六 御影堂(みえいどう)で一休扇(きゅうあふぎ)の早書(はやがき)……………八四

三五 夢は醒たが眼は覺めぬ……………一九〇

三六 嫉妬喧嘩は廢しなさい……………一九六

三七 前代未聞不思議な引導……………二〇一

三八 水を飲んだら粥を食へ……………二〇六

三九 早く身上を潰して終へ……………二一二

四〇 廓へ通ふなら通ひ貫け……………二一七

四一 禪師と地獄太夫の問答……………二二三

四二 正月は何故目出たい……………二二八

四三 貧道も女の傍に居たい……………二三四

二六 鬼の濟度は出家の役目……………一四〇

二七 病氣には黄金湯が妙薬……………一四五

二八 人間は本來空の無一物……………一五一

二九 貧道が恐いか此弱虫奴……………一五六

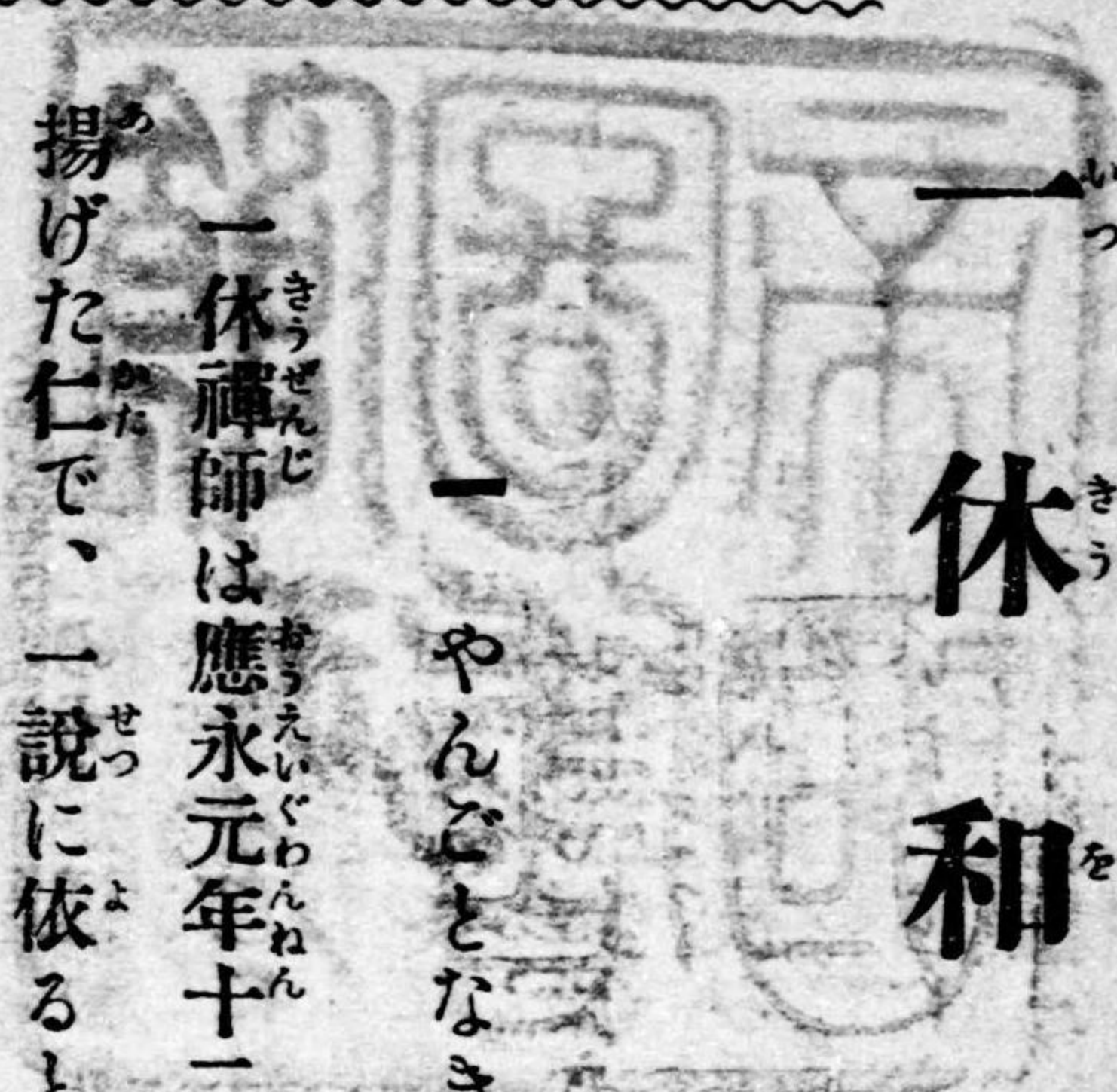
三〇 化物には是非遇ひたい……………一六一

三一 閻魔様へ手紙を届けろ……………一六七

三二 彌陀の淨土へ案内致す……………一七三

三三 腹が空いたら水を飲め……………一七九

三四 眞つ暗な處が十萬億土……………一八四



一 休 和 尚

一 やんごとなき方の御胤

狂 禪 坊 編

一休禪師は應永元年十二月廿八日を以て、京洛の今出川で産聲を揚げた仁で、一説に依ると或るやんごとなき方の御落胤だと云ふが、或は然うかも知れません。併し其邊は明白に仕ない方が宜らうと思ひます。幼名を菊麿君と申され、御生母には早く死別れ、高橋三位

四四	衲襠の裏へ墨繪の角盥……………	二三九
四五	天の笠は掛場所が無い……………	二四四
四六	下から上へは何が下る……………	二四九
四七	禪師の情と薬師の利益……………	二五四
四八	天地の間に生れた坊主……………	二六〇
四九	天智天皇月見のむしろ……………	二六五
五〇	名僧一休禪師の大往生……………	二七六

目 次 終

満寶卿 妹 玉江といふ者の手で育てられました。然るに玉江は性來の醜貌で、色はきびくと黒い處から、人に異名を「おくろ」と呼ばれて、此異名の方が通りが宜つたのです。然雖却々伶俐な婦人で、菊麿君大切と諸事注意に注意を加へて育てました効あつて、菊麿君は、い、い、とよく肥つて漸次愛らしくおなりなすつたが、憎まれ盛りの七歳には身體も健康な代り悪戯も随分劇しくなりました。恰度其年の歳末、庭へ降積る雪の中を駆歩いて遊んでゐたが、些と活潑が過ぎて悪るいたづらになつて來たので、玉江がこれを制めやうと思つて傍へ行き「若様々々」と言葉をかけると、菊麿君は振返つた

が「何ぢやおくろ」と御答へなすつた玉江は苦笑しながら「妾しはおくろと云ふ名ではございません、玉江と申します」と云つて顔を見ると、菊麿君も笑ひながら「何でも宜いわ、皆が其方の事をおくろくと云ふでは無いか、併しおくろ用事は何ぢや」「まあ何とでも仰有いませし、だが貴方は一體御幾歳におなり遊ばします」「呆けた奴ぢやな、其方は麿が生れ落ちてから今日まで手鹽にかけて育てて乍ら、麿の齡を知らんと云ふ事があるか考へて見い」「オホ、然う仰有つては全然御話になりませんが、まあ御聞き遊ばせ、往古菅原道真公は御齡七歳の時に、今日の如く雪の降る日御傍の小督と申す者

を御覽ごらんになつて、御歌おうたを御詠およみになりましたが御存知ごぞんちであらせられますか「イヤ知らんそれは何なんといふ歌うただ」「それなら申上まをしあげませうが恁様かやうでございます、

降る雪ゆきが綿わた々なれば手てに溜ためて

小督こがうが袖そでにつめたくぞ思おもふ

と御詠およみになつたのでございます、貴方あなたもモウお七歳ななつであり乍ながら那樣なはげしいお悪戯いたはか許ほり爲なさらず、切せきてはお歌うたでも遊あそばす御心掛おこころがけがなうては可いけません、些ちと御稽古おけいこでも遊あそばしませ「ウム然さうか好よう解わかつた、今いまの道真みちざねの歌うたをモウ一度聞どきかして呉くれい、何なんと申まをすのぢや「降

る雪ゆきが綿わた々なれば手てに溜ためて小督こがうが袖そでにつめたくぞ思おもふ、と恁様かやうでございます「何なんだそれだけか、那樣事そんなことは造作ざうさもない、磨まろにも直すぐ詠よめる「お詠よみ遊あそばしますか「あゝ讀よむとも、必然きつと詠よむよ「左様さやうでございますか、では何なにかお歌うたがございますか「あゝ詠よむとも即吟そくぎんで行ゆかう、うむ恰度雪ちやうどゆきの降ふるのが好機さいはひぢや」と云いつたが少時しばらく首びを傾かしげ「うむ出来できた、おくる此處こゝへ來こい、

降る雪ゆきが白粉おしろいなれば手てに溶ときて

おくるが面つらに塗ぬりたくぞ思おもふ

怎麼どうぢやおくる巧うまからう「玉江たまえも有繫さすがに是これには惘あきれて、お附つきの

女中と顔見合はしたたが、黙つても居られませぬので復もや苦笑しながら「左様な事を御意遊ばすものではございませぬ、妾だから宜しいやうなもの、他の者なら何の位る貴方を御怨み申すか知れませぬ、些とお慎み遊ばせ」と御意見を申しますと、菊麿君は呵々と笑つて「イヤおくる慍つたな、黒い所へ赤味が催した處は全然土器ぢや、其方は今後名前を土器と改めろ」と申されましたにはお附の者も困じ果てました。

二 極樂浄土へ往て見たい

其年の三月中旬、恰度時候も好いので岩清水八幡へ参詣とあつて、御供は乳母玉江を首め十四五名、表門で乗物を降りて石疊を通つて行くと、嬰兒を背負つたり抱いたりした女乞食がゾロ／＼出て來たのを、菊麿君は目早く見て彼れは何だと御訊ねなされる、玉江が彼れは乞食と申して袖乞ひを爲る者だと御話すると、俄に愁然として「乳母、非人乞食でさへ彼の通り幼少の時には母に抱かれるのに、麿はまだ母の懷中に抱かれた事がない、母上は何れへ參られたのぢや」と仰有つた。玉江は胸が一杯になつたが左あらぬ體で「此處は道路なれば御屋形へ御歸りになつた上申し上ます」と云つたが却々

肯かない、乃で據ろなく「御母君は若様御誕生の後間もなく冥途へ御出になりました」と云ふと「冥途と云ふのは何處ぢや」「極樂浄土でございます」「は、あ左様か、父母の恩は洪大である、殊に母は磨を産んで呉れた親ぢや、その顔を存せんのは不孝此上もない、今より母上の居らるゝ極樂浄土へ案内致せ、岩清水八幡への参詣は何時でも能る」何と制めてもお肯きなならない。玉江は據ろなく「それでは御案内致さない限りはございませぬが妾には能兼ねます、其御役は當今三名僧と云はれる興福寺、妙源寺、大徳寺の御住持方で莫れば能きませぬ」と云ふと「然らば興福寺へ参らう」と駄々を控

ねて御諾がない、今は仕方なく興福寺へ御案内をすると、住職傳道にお遇になつて「傳道、其方に頼みがある、磨は母に面會したい故極樂浄土へ案内致し呉れエ」とお頼みになつた。傳道も愕ろいたが莞爾として「それは最も老年の拙僧よりは、紫野大徳寺の養叟禪師の方がお宜しい」と申しましたので、直ぐ大徳寺へ行つて養叟禪師にお遇ひになる「禪師氣の毒ぢやが極樂浄土へ案内致し呉れい、磨は母に遇ひたい」「委細畏まり奉る、併し極樂へ御出でなるには御出家遊ばして、行徳法徳をお積みにならんければ可けません」「あ、左様か、最と易い事である、今日より出家して當山に留まる、玉江

始め一同歸れ、鷹は行徳法徳を積んだ上冥途へ行つて母君に對面するであらう」又しても何と制めても肯かない、玉江は據るなく禪師に頼んで歸ると、其後で菊鷹君は無頓着なもので「これ菓子を持って」と仰有る、早速持つて行くと、バクリと食つたが忽ち捨て「こりや不味いモット美味しいのを持つて來い」と我儘一杯です。禪師は是れを見て「それは可けません、既に佛門にお入り遊ばす上は拙僧は師貴方は弟子でござる、此上共母君に遇ひたいと思召すならば我儘を慎しみ、師を大切にし法類には信を以て交り、行徳法徳を積まねばなりませんそれが能んければ是非に及ばず御館へ御送り申します」

と諫めました。スルト、是れを臥て聞いてお出になつた菊鷹君は我破と跳ね起き、遙かに飛退つて兩手を支え「御師匠様どうぞ御許し下さい、鷹は禮式を知らないので無禮を致しました、向後も何うぞ御意見を願います、あのお肩でも敲きませうか」と打つて變つて温順しくなりました。三日経つても四日過ぎても御歸館がない、玉江が御迎ひに行くと母君に御目に掛らん内は歸らんと仰有る。捨て置かれぬとあつて右の次第を畏き邊りへ奏問すると、然あらば菊鷹の意に委せよと御許しが出る、今はモウ仕方がない、玉江は此事を菊鷹君に告げ、養叟禪師へ更めて頼むといふ事になり、茲で愈々佛門に入

る事となりませす。

三 二百文で四十雀の引導

應永七年四月八日、菊麿君は僅か七歳といふ幼少の身を以て剃髮する事となりました。當日紫野大徳寺の本堂には、紫衣の僧八人緋衣の僧二十人黒衣の僧六十餘人東西に居流れ、正面には養叟禪師緋の法衣を着用して控へ、上座には日野大納言殿着座される。祇園入無意眞實法恩謝徳と禪師は菊麿君に引導師を渡し、自ら剃刀を執つて三度頭上を擦り、一老僧入れ替つて衆僧の讀經中にスツカリ髪を

剃つて圓い頭に仕ました。菊麿君は鏡に姿を寫し見てニコ／＼笑つてお在なさる。豫て用意の袈裟法衣の裾短かなのを着けた時に禪師は珠數を參らせ「今日より佛門に入りたるを以て法號を宗純と命ずる、左様心得まするやう「有難う存じまする」是れで式を終り日野大納言は歸館される、其後羽陵、鐵梅、周海、本齋等の法類が、禪師に命かつて更る／＼宗純へ經文を教へるに、記憶力も強く第一聲が美しい。禪師も末頼母しく思つてゐると、其代り惡戯の方も却々劇しく、毎日佛學を終ると庭で木登りを仕たり、犬に乗つて駆て歩か、すべて用を爲るのにも惡戯を爲るのにも陰陽のないのを禪師は

欣んで、別に叱言も云はずに居る。一夜宗純に向ひ本堂の燈明を消せと命じますと「畏りました」と駈けて行つたが、フツと口で消した様子を師が見て「コレ、宗純何故口で消した。唯「勿體ない事を致すものではない、口は諸々の不淨を啖ふものぢや、其の口で御燈明を消してはならん、今後は團扇で消しなさい」「左様でございませうか、御師匠様それでは御經は讀めませんな」「何故」「それでも口は諸々の不淨を啖ふものです、以來何で讀んだものでございませう、豈夫團扇で御經は讀めませんが」「ウム成程、併し心得の爲めに言つて聞かせる」「私も心得の爲めに承ります」「是れから經文の話をし

て聞かされたが宗純は一向平氣で「御師匠様有難うございませう、併し經文の讀始めもヤツパリ口で讀んだものでございませう」「左様である」「那樣ら口で御燈明を消しても差支えはございませう」「禪師も餘程弱つた。併し其才を愛で捨て、置くと、一日門前に飴菓子を賣る老婆が来て、平素大切にしてゐた四十雀が死んだ故引導を渡して呉れと頼みました。取り次に出た宗純は「婆さん幾らか持て來たか」「御布施を二百持つて參りました」「左様か早く出しなさい」「引つ奪るやうにして門前へ飛出し、餅菓子を買つて來て残らず平げた」「さあ本堂へ御出で」宗純は本堂正面へ鳥籠を据ゑて「夫れ萬物に長た

る人間でさへ五十年也爾小鳥の身を以て四十雀とは生き過ぎた喝』
 とやつて「さあ婆さんは是れで好い」婆さん驚いてブツ／＼呟し乍ら
 歸らうとした處へ養叟禪師が歸參した「宗純何を致して居る」御歸
 り遊ばせ、今この婆あさんが四十雀の死んだのを持つて來て、引導
 を渡して呉れと云ひましたから渡して遣り、御布施は菓子を買つて
 食べて終ひました「ホ、ウ左様か却々早いな、何う云ふ引導を渡し
 た」ハイそれは極好い引導でございます「何と申した」夫れ萬物の
 長たる人間でさへ五十年也爾小鳥の身を以て四十雀とは生き過ぎた
 喝、御師匠様如何でございます」養叟禪師手を拍つて欣び「婆アさ

ん／＼「ハイ」汝好い引導を渡して貰つて嬉しいだらう「ナニ嬉し
 い事はありませんねえ、貴僧のお歸りが遅いので二百只取られやした
 「婆アさん莫迦を云ひなさい結構な引導だ、二百では廉い／＼」婆
 アさん驚いて逃歸りました。是れが禪家で名高い小鳥の引導といふ
 お話。

四 嗚呼爾元來生木の如し

一晚遅くなつて養叟禪師は夜食の菜に鮭の粕漬を炙いてゐました。
 是れは老年で漸次身體が衰弱する爲めに、醫師に勧められて食べる

のだが、弟子の手前遅くなつて居間を閉切り、今チユウ／＼炙いてゐると、宗純便所へ往つた歸りに臭ひを嗅ぎ附けた「おや誰れか鮭を炙いてゐるな、御禪師様の御居間の方から臭つて来るぞ、こりや御禪師様かも知れない」竊と往つてガラリと襖を啓けると、茶漬を搔込んでゐる禪師は驚いて鮭を隠した「御禪師様貴方は何を召上つて御在なさいます、モウお隠しなすつても可けません、出家が物を隠すといふ事はございませぬ」貧道は何も隠しは仕ない「御膳の下へ何か入つて居ります」まあ好い、彼方へ往つて臥て終ひな「否え臥ませぬ、御膳の片附くまでは幾日でも此處に居ります」と云ひ乍

19 一 休 和 尚

ら手早く鮭の皿を引出し「御禪師様、是れは魚肉でございませぬ、貴方は平素生臭い物は食べてはな、んと仰有り乍ら、御自分は恂う云ふ物を召上るのでございませぬか」禪師も有繫に弱つた「宗純是れはな齡の若い時には食べてはならんが、貧道の如に齡を老れば宜いのちや「あゝ左様でございませぬか」うむ差支えはない、自分にも齡を老ると身體が疲れて經が讀めない故、據らなく滋養を專一に致すのちや、別に佛罰が中る筈はない、それに貧道はチャンと魚肉に引導を渡して食べるのちや「解りました、併し何う云ふ引導でございませぬ、心得の爲めに何うぞお教え下さいませぬやうに」可しく今教

へて遣す」禪師も益々窮つたが詮方なく、鮭を載せた皿の縁を敲き
 「爾元來枯木の如し活さんとすれ共再び水中に泳ぐ能はず寧ろ愚僧
 の腹を肥して佛果を得よ喝、恚う引導を渡して食べれば仔細はない
 「有難うございます好く解りました「併し内密に致して呉れ、法類
 告げてはならんよ「決して語りは致しません澤山御養生をなさい
 まし」其儘立つて居間へ歸つたので禪師はホット一息吐きましたし
 翌る朝になると宗純臺所へ出て毎の通りよく働いてゐる、下男は味
 噌汁を拵へて何を實に入れやうかと考へてゐると、宗純は「私がお
 汁の實を持つて来るからお待なさい」と云つて、突如大きな目筈を

持つて飛出し、泉水から大きな鯉を一尾掬ひ上げて来て、俎板へ乗
 せて切らうと仕たので、他の弟子が驚いて禪師に告げると、禪師も
 臺所へ来て「コレ」宗純何を爲る「御禪師様今日は一同の者へ養
 生の爲め魚肉を遣はさうと存じます、私は若年でございます、誠に
 柔弱で身體が衰へ、經を讀むにも聲が顫へてなりません故、是れ
 を防ぐ爲めに私が第一番に此鯉を食べます、だが引導を渡してから
 食べます故御安心遊ばすやうに「ふむ左様か、何と云つて引導を渡
 す「夫れは何に造作もございません「何う云ふ引導だ早やく聞かせ
 なさい「只今引導を渡して御覽に入れます、少時御控へを願ひます」

宗純研ぎ澄ました庖丁を執つて鯉の脊中を二三度擦つてゐたが旋て「爾元來生木の如し活さんとすれば逃げんとす再び水中へ入つて泳がんよりは寧ろ愚僧の腹に入つて糞となれ喝」とやつた、養叟禪師は驚いた事一通りでない、何うするかと見てゐると、其儘ドンドン鯉を刻んでお汁の鍋へ入れて終ひ、煮えるのを待つて宗純共つ先に食べ始めました、養叟禪師は舌を捲いて居間へ歸り「あゝ宗純は適れ名僧になるであらう」

五 蓋を除ずにお汁を上れ

茲に機屋竺齋といふ町人がありました、母は長崎生れ父は和蘭人で、其の父が和蘭へ歸る時に錦を織る事の口傳を傳た爲め、竺齋は京洛へ上つて機屋を開業した、是れが西陣織の元祖だ相で、禪學を養叟禪師に學び、殊に碁敵の交りも深く、折々來ては夜更しを爲るので弟子達の評判が至つて悪い、宗純何か考へてゐたが大きな紙へ筆太に「魚鳥は申すに及ばず四ツ足の皮類門内に入る可らず」と書いて貼つたのを弟子達が「是れは何だえ」と訊くと「是れは竺齋足止めの法だ、門まで來ても是れを見れば入らないで還るから御覽」「大丈夫かへ「請合だよ」恚う云つてゐると其夕方竺齋が遊びに來

て偶と此貼札を見附けました。一體何で宗純が這麼物を貼つたかと云ふに、竺齋は始終腰へ獸の皮を纏つて冷へない如に仕てゐる故で、竺齋の方も此貼紙を見て「は、あ宗純の悪戯だな」と勘付いたが、平然として門内へ入つて來たのを、宗純は目敏く見て「オイ竺齋さん、老い年をして門に貼札のあるのが解らないかえ」「解つてゐる」「それなら汝は腰に不淨の皮を被てゐながら入つて來る法はあるまい」「ハ、、、宗純さん駄目だよ、俺の方が汝より門松を餘計に潜つてゐる、一體本堂の太鼓はありやア何うしたものだえ、ありやア畜生の皮ぢやないか、四ツ足の皮類が門内へ入つて可けなければ太鼓

から片附けなさい」宗純は黙つて奥へ入つて終ひました「ハ、、、幾ら智慧があつてもヤツバリ子供だ」と、竺齋はうつかりしてゐる背後へ宗純は薪を持つて忍び寄り、突然竺齋の腰を毆し附けた「アイタ、、、宗純さん何だつて私を毆るのだ」「オイ竺齋さん、本堂の太鼓は四ツ足の皮で製へたものだから佛罰が當つて平常毆られるのだ、汝も不淨の皮を被てゐるから罰が中るのだ覺悟しなさい」と云つて三ツ四ツ毆し附けたの下、竺齋は這々の體で逃げ歸つたのを、後で禪師が聞いて腹を抱へて笑ひました。が、それから竺齋は稀に來ても、長座を仕ないやうになつたので、御弟子達は欣んでゐると、

一日三條寺町の錢屋久右衛門といふ者の隠居が来て、禪師と四方山話の末「エ、今日は少々お願ひがございます」「あ、何ぢやな」「明日法事を致します」「成程」「就きましたは禪師様に宗純さんをお伴なすつて、是非御光來を願ひたいのでございます」「あ、左様か宜しい承知致した」「有難うございます」「錢久の隠居も欣んで歸つたが偕整る日、禪師は宗純一人を供に連れて錢屋へ參りました。是れが表立て大徳寺の禪師を招いて法事を爲るとなると却々容易ではないが、錢久は竺齋同様平常心易いので禪師も手輕に出掛ける、家内一同の挨拶も濟んでお膳が出る「粗飯でございませうが何うぞ御寛り召上つて

下さるやうに」といふ事で家内の者が禪師を欸待す、禪師の傍には同じやうに宗純にも膳が出てゐる、旋て禪師が箸を採るので宗純も取らうとすると、錢久が「あ、宗純さん何うぞ蓋を取らずお汁を召上つて下さい」と頼んだ、禪師が「宗純ソレ見ろ、平常貴様が種々の悪戯を爲るものだから恚う云ふ目に遇ふのだ何うして食べる」と訊くと、宗純澄ましたもので「左様なら蓋を取らずに頂戴いたします」と云つたが却々手を附けない、二ツ三ツ話をしてゐたが「あ、飛んだ事を致しました、ツイお汁を冷しました故何うぞ盛替へて下さいまし」家内の者が来て盛替へやうとすると「あ、もしく何う

ぞ蓋を取らずに盛替へて下さいまし」と云つたので錢久は恐れ入つて終ひました、禪師も笑ひ乍ら「錢屋到頭やられたな」

六 あゝ生如來様生如來様

大徳寺の門前に勤兵衛といふ老人が居る。一日餅を搗いたので、禪師様へ御初を上げたいと云つて大きな餅を持つて來ました、折柄恰度何人も居なかつたので、宗純是を受取つて、棚へ上げて置いたが、見れば見る程旨さうな耐らない。あゝ旨さうだ何うかして些し喰べたいが喰べたら叱られるだらうと、最初の間こそ耐忍も仕てゐ

たが、それを凝と辛抱するやうな那樣溫和しい宗純ではない。エ、儘よ叱られたら謝る分の事と度胸を定めて其餅を半分千切り、砂糖を方々搜すと稍く見當つた併し其時分の事だから白砂糖ではない天光よりもまだ赤い黒砂糖、今でいふ養砂糖です。それを附けて獨りでムシヤク喫つてゐる最中に禪師が生憎く歸つて來た。さあ大變、何う仕たものだらうと餅を食ひかけてグル／＼廻つてゐる處へ、スーッと入つて來た禪師は宗純の怪しい舉動に目を注げ、偶と棚を見ると餅が半分載つてゐて傍は砂糖だらけだ。禪師偕はと覺つたが別段叱言を云ふのでもない。併し一つ困らして遣らうと、宗純を招び

「宗純此處に餅があるな」「へい」「誰れが持つて来た」「門前の勘兵衛が御初だと云つて只今持つて参りました」「うむ左様か勘兵衛が持つて来たか奇特の事ぢや」「左様でございます」「併し宗純」「へい」「十五夜の月は眞ン圓なるものを」と云ひ乍ら宗純の顔を見ました。宗純袂から食ひ差しの半分を出し「雲隠れして此處に半分」禪師も追がに黙つて見てゐたが「好しくその當意即妙に愛で、半ばは其方に遣はす」と云ふと、宗純「有難うございます」と云つたが柵の上に在る残りの半分を卸して持つて往かるとする「コレくそれを遣はすのではない半分遣るのだ」「御師匠様、私は半分食べて終つた處で

見附かつたのです、更めて半分遣ると仰有るのは是れを下さるのでございませう」到頭皆んな貰つて終まひました。併し禪師は叱言を云はず益々慈んでゐる内に翌年の三月となり、宗純は朋輩弟子數名と共に、師の許しを受けて嵐山へ花見に往きました。嵐山は花よりも寧ろ眺望が佳い。一同は彼方此方を見歩いてゐると、泥酔した田舎者らしい一人の老人が手に一升樽を提げ、蛸の足を食ひ乍らやつて来たが、何と思つたか宗純等の中へ割込んで「オイくお仲間を遣らうさあ是れを喰ひなさい」と、喰ひかけの蛸の足を突出した。先に立つてゐた鐵梅といふ朋輩が「イヤ御老人御志は辱けないが

僧侶の身上だ魚肉は口にし難い平に御断り申す」と断ると老爺さん
眞赤になつて慍つた「オイ、小坊主僧侶だから蛸は食へねえ、へ
ン面白いや坊主が蛸を食ふと何うなるんだ「イヤ酔つてゐなざるや
うだからまア往かつしやい魚肉は五戒の中にも堅く戒めてあるのぢ
や「へ、、腥坊主め、汝達は是れを食はなけりや什麼な良い出家
になるのだ、お前の如な人に引導を渡して貰ふ人こそ可哀想だ、サ
ア食へ、食はねへ内は動かないぞ一鐵梅愕いた。其時ツカ〜と進
み出て宗純、突如其蛸の足を取るより早く「佐州は一味天然の別
他禁戒は老釋迦に犯す」と云ひ乍らムシヤ〜食つて終まつた。老

爺は樽を投捨て「ア、今日始めて生如來に遇ふたり有難し〜」と
言捨て三拜九拜して立去りました。一同は惘れて立歸り此旨禪師に
告げると、禪師も是れを聞くと宗純を三拜し「ア、其方は禪家の寶
ぢや」と仰有つた。

七 土で捏ねた茶碗大切か

宗純或時偶と歌を詠んだ、養叟禪師それを聞いて感心し、それが
動機となつて一休といふ法號を新に授けられ、大徳寺の一休は奇童
である、惘發の僧であるといふ噂が洛中に擴り、是れが竟に時の將

軍足利三郎義満公の耳に入り、或時禪師共々御所へ召されました。將軍家の左右には畠山修理太夫首め名ある人々綺羅星の如く居流れてゐる。義満公から禪師に御言葉を下され「一休近う」と云はれると、一休は臆する色もなく側近くツカ／＼と進んだ。義満公も笑ひ乍ら「一休とは其方か」御意にございます、御召に依り師に隨ひ罷り出でました一休、上の麗はしき尊顔を拜し大慶至極に存じ奉つる。「好う参つた今日は予に面白い話を仕て聞かせえ」左右する中御膳部が出る、見るとそれが魚肉であつたが一休は委細構はず箸を採らうとするの、將軍家は御覽遊ばし「こりや一休「はい」「其方は魚肉

を食べるか師の養叟さへ箸を採らんのに其方は何故喰べる、仔細を申せ「唯、御訊ねでは恐れ入りますが一向差支へございません、元來口は鎌倉街道のやうなもので、此街道からは八百屋も通れば魚屋も通り町人でも武士でも牛でも馬でもすべて此處を通ります、それ故魚肉を頂きましたも一向差支へございません」と云ひ乍らムシヤ／＼食へ始めた。將軍家凝と其様子を見て居たが「一休「唯「予も其鎌倉街道を通るから通して見ろ」と云つて佩刀をスラリと引抜き、一休の鼻の先へ突附けた。禪師は驚いて止めやうと仕たが當人は平氣でアーンと口を開く、佩刀の先が口に當ると前歯でガチ／＼やつ

た。義満公は「一休どうちや是れが其街道を通るか」「通らん事はございませんが暫く當關門へ留めて置きます」「何故留める」「然ればでございませぬ、今や南朝の殘黨諸所に散在して事を起さんとする折柄、諸國には嚴重に關所が設へてあります、口は即ちその關所にございませぬ、怪しいと思ふ者は暫く當關門に留めます」「義満公ハタと膝を叩いて佩刀を鞘に納め「禪師其方は良き弟子を得たり一休は名僧になるであらう、大切にして養ひ取らせよ」と仰有つた。禪師面目を施してゐる面前へ桐の二重箱に收められた茶の湯の名器が取出され「是れは高麗より渡來せし蛇の目の茶碗といふ名器ぢや、予は近日

新樹庵（大徳寺）へ罷り越すであらう其砌り此茶碗で茶を予に服させよ立前は一休に申附ける「畏り奉る」と養叟禪師は數々の下され物があつて一休を召連れて立歸つた。さあ大徳寺では大層な評判だ、禪師は件の茶碗を大切に藏つて置くと或は禪師の不在に一休が子坊主共にそれを見せやうとして過つて二ツに割つて終ひました、子坊主共は蒼くなつてゐる處へ禪師は御歸りになつたのを見て、一休は師の前に立塞がり「什麼生」と云ひかけると禪師も立つた儘で「説破「生あるものは如何に」「必ず碎く」一休此の時袂から件の毀れた茶碗を出して「恁くの通り」と澄してゐる。禪師も驚いて恁く

の通りもないものだ、將軍家へ對し何と御詫びを仕やうかと思案してゐると一休は

高砂の尾上の松も枯るゝなり

土でつくねた茶椀大切か

と一首詠みました。禪師手を拍ち良い申譯が出来たと欣び、是れを添へて義満公へ御詫を爲ると、將軍家は怒りもせず却つて深く感じ入り「あゝ一休は適れ名僧の器である事毎に感ずる許りぢや」と仰有つて更めて禪師諸共御召になり、禪師から麈相を御詫びすると快く御宥しになり「一休、予が此世を去らんとする時は其方に引導を

頼むぞよ」

八 後生をば願ひ過ぎるな

一休が十八歳の春を迎へた時、將軍義満公圖らず病に罹り餘程の重體と見えしました。さあ一休へ度々の御使がある「豫て頼み置きし通り予愈々現世を去る時には其方に引導を頼むぞよ」とあつて丁寧な御言葉を下される、一休快く承諾して置くと養叟禪師も其年の二月末から病の蓐に臥すやうになつたので、一山の僧侶を始め禪家の徒は是れを憂ひ、只管禪師の病氣全癒を祈つて居る内に五月と

なりました。大悟徹底してゐる名僧養叟禪師は死期を覺り、其月の末の一日、今日こそ落命するにあつて沐浴をして身體を淨め、清き袈裟衣を着用して本堂へ出で、椅子へ凭つて靜かに死期の來るのを待つて居ります。お弟子方は悉く本堂へ集り、涙と共に經を誦さうとすると禪師は「これ／＼經文は常に腹にあるもの故必ず誦する事勿れ」と制の休を招べと云つた。素より膝近くに居た休は一層膝行り寄り「師の坊一休はチャンとお側に居りますモウお目は見えませぬか」お、一休か我れ最早兩眼明かならず往生只今にあり我れ死なば一休其方に傳道を頼むぞよ」傳道といふのは死後大徳寺の後

住となり、佛門を固く守つて益々禪學を弘ろめよといふ意味です。一休が「確に承知仕つりました」と云ふと禪師は細き聲を揚げて
極樂に左のみ用事はなけれども

彌陀を助けに行かざるまじ

と云ふと一休が「善哉、喝」と手を拍つ。それと同時に禪師は齡七十七歳を以て芽出たく入寂しました。禪師も豪いが一休も傑い、其刹那の呼吸には何とも云へぬ處がある。一山の人々を始め擅家一同是れを聞いて敬服し、今更の如く禪師を追慕する者もあれば一休を賞揚する者もあり、この噂は却々に高い處、それより五日經て室町

御所から一休の許へ急の使が来て、將軍家御大切の場合故即刻同道
されたしとの事に、一休は豫ての約束に従ひ、法衣を更めて早速伺
候すると、義満公は御所の奥深き寢殿に静かに重病の身を横へ、今
や臨終も近づいたる事として、洛中洛外の名僧智識その傍らに在つて
經文を唱へ、御側には石堂右馬頭、畠山修理太夫等首め夥多の老臣
が君を案じて咳一つ爲る者が無い。一休そつと罷り出でた時に義満
公御側に向はれ「一休は如何致した」と仰有つた。一休は衝と進ん
で「御側に進みましたとございます」と云ふと將軍家は細く眼を開い
たが「おゝ一休か予はモウ落命致す、豫て頼み置いたる通り引導は

其方に頼むぞよ」と重ねて云はれた。一休は此時更に傍近く進み
「臺命にはございますれど宗派が違ひます故、参り居りまする長國
寺長老に引導をお受け遊ばすやうに」と答へた。義満公是れを聞い
て「左様であるか、宗派が違ふとあれば據ろない、予は其方の引導
を斷念するであらう」と仰有つて今や瞑目せんと仕ました。一休は
それと見て將軍家の耳に口寄せ
後生をば願ひ過ぎるは要らぬ事

もう極樂を通り過ぎなば
と囁く、義満公は閉ちかけた眼を半眼に開き、嬉し氣に一休の顔を

御覽 すすたが其儘スヤ／＼と再び眼を閉ぢやうとするので、一休は只一と言「喝」と浴せる。將軍家はそれで快く御他界になりました。都の騒ぎは一通りでない。それと共に一休の名聲は更に洛中に轟く。

九 今日(けふ)は三七日(ななつか)だ皆(みな)嫌(いや)だ

紫野大徳寺では養叟禪師入寂につき、一山の僧が寄つて跡目の相談を開いたが。是れは禪師の遺言もある事として、異議なく一休が襲ぐ事となり、正式に公儀へ願出て滞りなく跡目に直りました。モウ

是れからは元の一休とは違ひ、大徳寺の一休禪師として人々の尊敬を受ける如になりました。處が何故か先師養叟禪師の佛事も營む様子もなく、其儘に打捨て、置くのには、元の朋輩を始め講中世話人の人々深く心配し、其の事を一休禪師に訊ねると、禪師は微笑して「いやそれは好し存じて居るしかも明日は三七日に當るのぢや、決して佛事を忽がせに致すのではない、又忽がせに致しては師僧に相濟まん、今まで法事を延ばして置いたのは實は明日の三七日を持つて居たのぢや、恰度幸ひ今貧道が下書を致すに依り、其通り數千枚の札を書いて、洛中洛外は申すに及ばず、山城一ヶ國に洩れなくそ

の札を配つて貰ひたい、殊に洛中は建札にして建て、下さらんか」と云ふ。乃で御弟子方を始め擅家世話人信徒總代等は承知して下書を見てゐると、一休禪師筆を執つて「明二十一日先住養叟禪師三七日の法事相勤め候間信徒に打揃うて御參詣下され度候」とスラスラと書き、これを残らず假名で書けと云ふので、是れから手分けをして數千枚認め、山城一ヶ國へ洩れなく貼札を仕ました、スルト是れを見た者は、今度一休様が大徳寺へ御直りなされ、今まで法事を捨置いたのは何か思召があつての事に違ひなく、明日は必然お立派な事だらうと、參詣往く程の者は前日より用意をする位ゐ、此方

は大徳寺の人々「エ、禪師様に伺ひますが、明日はお膳部をどの位の支度したものでございませう」汝方はどの位ゐ要ると思ふ「先五千人前は要らうかと心得ます 貧道はそれでは足りまいかと思ふどうしても一萬人前は要るだらう」それならモウ支度が遅れた位ゐでございませうが「いや遅れない貧道がチヤント支度を仕て置いた、只汝方は明日嚴重な出入口を拵へ、入る者は入れて、百人づゝ入れ替りに法事の席へ直せば宜いのだ、給仕は後住になつた挨拶旁貧道一人です、心配せんでも宜い、夫れから本膳を一膳持つて參れ、品物は貧道が入れるから」寺僧は何をするかと思つて早速本膳をそ

れへ持つて來ると「ア、是れで好い、此一膳で五千人にでも一萬人にでも使ふ、大きに御苦勞だ」一同は心配したが別に變る事もなく其夜は寢て、さて翌る日になると夜の明けぬ内にスツカリ一切の飾り附けを終り、早朝から擅家の者や信徒が夥多參詣に参ります、大徳寺の門前は押し合ひ犇し合ふ騒ぎで、各自米だの大豆小豆の類を袋に納れて持つて参り、す、本堂は又却々の賑ひで、夫れ等を請取る者が大勢居る「サア、參詣が濟んだら膳部の用意がしてあるから是れへ」と云ふ、入口と記してある處から一同ゾロゾロ入つて百人づゝ並ぶと何も出ない、少時待つてゐる處へ一休禪師麻の法

衣を着用し膳を一膳目八分に持出して其處へ据ゑた「諸皆の衆今日よく來てお呉れた、師の三七日の法事だから、サア、遠慮なく是れを見てお出で、みなぬかくだ」一同の者が見ると驚いた、お平椀もお壺も悉く糠が盛つてある「どうぢやな見たら入れ替つても宜からう」這麼具合で百人づゝ幾度も入れ替つた、參詣の者は驚いて歸つて終ふ、跡で禪師は寺僧に向ひ「奉納の品は皆んな施して終ひな、そして汝達も此處へ來てみなぬかを御覽」寺僧は開いた口が塞がらない。

一〇 大黒天の米俵は無要慎

攝州高槻の城主山名彈正少弼師氏といふ大名がありました。夙に禪門に入つて養叟禪師に歸依し、月に凡そ二回師を招いて禪學の講義を聞くのを楽しみに仕て居たが、禪師の歿後大徳寺の住職に直つた一休禪師をまだ一度も招く機が莫つたのを遺憾に思ひ或時使を以て禪師を丁寧高槻へ迎へました。素より卒直な一休禪師は早速快諾し、近日参るとの事に使は欣んで立歸り、此旨師氏へ復命に及んだので、高槻城内では支度をして心待ちに禪師を待つてゐると、二

三日の後一人の若僧が庵末な服装で山名家の立關敷臺へ差蒐りました。鼠の衣類麻の衣を着用して草鞋を穿き首に三衣袋を掛けてゐます。取次の侍が「何方から御光來だ」「京都から参つた」「それでは若しや大徳寺様からではござらぬか」「如何にも大徳寺から参つた」「ア、左様にござるか、然らば一休禪師は程なく御着と見えますな」「アハ、お侍、貧道が一休だよ」「エツ、少時お控へを……」侍は面喰つて奥へ往き、右の趣を急いで彈正少弼へ告げると、師氏も驚いて直ぐ立關まで出迎へました「是れは、禪師宜うこそ御光來下し置れた、師氏身に取つて如何許りか満足にござりまする、卒ぎ御通

り下され御案内仕るべし「アイく、貴公は山名殿か、一休お招ぎに
應じて早速参つた三界無庵樹下石上を宿として居る身ぢや、招かれ
ば穢多非人の家へも参る、併し見受けた處非人小屋よりは手廣い
お住居ぢや「恐れ入ましましてございます」直ぐに奥へ通して茶が出る
菓子が出る、丁寧にあつて禪學の話いろくあつた後師氏一休の前
へ一幅の掛軸を持出して両手を突き「恁く拜顔致しましたるは何よ
りの幸ひ、禪師に折入つてお願いがござる「何ぢやな「他ではご
ざいません、是れは先祖より傳はりましたる大黒布袋の掛物でござ
います「成程「どうか此掛物へ讃を願ひたいと存じまするが……

「オ、左様か、好しく筆墨を持つて來さつしやい、直ぐと書いて
上げやう「ハツそれは有難い事で、併し何か御腹案でも……「イ
ヤ別に腹案も無い、掛物には大黒と布袋が書いてあるのだらう、大
黒も袋を有つて居れば布袋も袋を有つてゐる、只それだけの事だ、
早く筆と墨の用意をさつしやい」寔に手易いものだ。師氏は早速家
來に命じてその用意を整へさせると、禪師は筆にタップリと墨を合
ませて、

大黒尊天其面黔
平生愛鼠是何事

諸人信仰置棚陰
足下米俵無要慎

京都の寺社奉行に蜷川新左衛門といふ武士がありました。漢學も能くし佛學にも長じた人物で、一休禪師の噂を聞いて一度その學力を試したいと思つてゐると、八月十五日となつて岩清水八幡の大祭がありました。此時新左衛門は馬乗で大徳寺の門前を通ると、恰度禪師が門前で往來を看めてゐたが「コレ待て〜其方は新左衛門ではないか、蜷川であらう」と云つた。新左衛門も黙つて行く譯にも往かず馬の足を留め「是れは〜禪師におはしますか新左衛門乗打の御無禮平に御宥しを願ひます」「何處へ往くのぢや」「是れへ参ります」と云ひ乍ら扇を開くと、禪師は「コレ〜新左衛門字が違ふぞ、

それでは奉行の役が勤まらんよ」と仰有つた、新左衛門「ハツ」と云つたが馬上で顔を赤くしたといふのは、成程扇といふ字は戸冠に羽の字を書く、是れを二字にするに戸羽だ、然るに新左衛門は山城の鳥羽へ往くので扇を揚げて戸羽へ行きますとやつたのだが、對手が禪師だから滿まらぬ事で凹まされた。乃で四五日の後新左衛門は今日こそはと意氣込み、武者修行の如な打扮で大徳寺の玄關へ蒐りました「頼む、頼む」出て来たのは奎齋といふお弟子「何方から」「彼方から」「へえ」「分らん子僧だな彼方から来たといふに」「はア左様で、一體何御用でございます」「禪師にお目通りすれば分る」「御名

前は「天地乾坤とも云ひ地水火風空とも云ふ」へた少し御待下さい」
 空齋驚いて奥へ飛込み、禪師に委細を告げると、禪師は笑つて「そ
 れは新左衛門に違ひない、是れへ来いと云ひなさい」「畏りました」
 空齋は復び出て来て「エー蜷川新左衛門殿でございませうか」「分つた
 かい」「エー禪師様が左様仰せられました」「道がは禪師見上げたもの
 だ」「通るよ」「どうぞ此方へ」新左衛門奥へ通りませう、禪師に先日
 の詫びを仕した後「エー禪師に伺ひませうが、あの佛前に供へてある花は
 何故佛に後ろを向けて供へますのでございませう、些と違ひませうや
 うに存じますが……」「アハ、那様事を聞いても仕方がない、新

左衛門汝の羽織の紋は何處に附いて居る」「背後に附いて居ります
 「ソレ見なさい、自分の紋が自分に見えず他に見えるやうに附いて
 あるではないか、佛に供へる花とても道理は一つぢや」「恐れ入まし
 た、然らば伺ひますが、世に地獄極樂と申す事がございませう、彼れ
 は一體あるものでございませうか、それともないものでございませ
 うか」「新左衛門」「へえ」「貴様は馬鹿ぢやな、能く考へて見ろ、貴様
 は寺社奉行といふ大役を勤めるものではないか、それが地獄極樂の
 有無を問ふ杯とは何事ぢや、下司下郎なら卒ざ知らず其方程の者が
 地獄極樂の有無を知らんと云ふのは俗に申す祿盗人ぢや、盗人武士

畜生武士、イヤハヤ言はうやうなき男ぢや」禪師に恚う罵られて新左衛門は烈火の如く憤つた、ブル／＼と身を顛はして面色を變へ、刀の柄へ手を掛けてテリ／＼と詰寄り「禪師、少々お言葉が過ぎは致しませんか、不肖ながら寺社奉行を勤むる新左衛門を捉へ、祿盗人とはよく仰有つた、さあ盗人武士の所以を承はらう、次第に依つては禪師とて容赦は致さん」と睨まへた、禪師は持つてゐた拂子で柄をピタリと押へ「新左貴様は貧道を斬る氣か、ソレ其處が地獄ぢや抜けば忽ち針の山血の池地獄、解らんか」新左衛門ハタと膝を打ち「恐れ入りました面目次第もございませぬ」と云へば、禪師膝を進

めて「新左解つたか、ウム笑つたな、笑へばそれが極樂ぢや」へ、
成程」

三 人間の一生は色則是空

寺社奉行蜷川新左衛門も、一休禪師の才學には一々敬服しました
が、更にまた問を發した「禪師、それでは伺ひますが、この人間一
生といふものは何う云ふものでございませう」「ア、是れは却々難し
いな、

世の中は食つて糞して寝て起きて

只その後には死ぬるばかりぞ
どうぢや解つたか「成程、然らば佛法の極意といふのは如何なる處
にございまするか」「是れは又難しい事を考へたな、極意細毛の如し
と云つて微妙の處にあるものぢや、

佛法は鍋の月代石の髭

繪に描く竹の共摺れの音

どうぢやな解らんか「へ、え何うも恐れ入ましてございます、モウ
今日はお暇して是から公用の暇にまたチヨク／＼と伺ひます、どう
か宜しくお稽古 ……「ウム左様か併し新左衛門用といふものに

暇があるか「是れは恐れ入りました、用に暇はございませんが、奉行
所には月三齋休暇がございます」「然うかその休暇の時にはお出で、
貧道も汝の小屋へ訪ねるから「お待ち申します、併し禪師手前は小
屋には居りません屋敷に居ります」「コレ／＼武士の住居は何れも小
屋だ、自分の死ぬ墓場に居るやうなものだ、屋敷と思つては御奉公
が能ん「寔に恐れ入ります、では御暇いたします」「新左衛門暇を告げ
て玄關まで往つたが慌だしく駈戻り「禪師様肝腎な事を忘れました
「何ぢや「佛には何うしてなれますか、ツイ伺ひ漏らしました」「禪
師眼と口を擴げてウムと睨み「生憎のだが今日も口も用を仕てゐる

から其中にお出で「左様でございますか、それではあの在家で百萬遍を致しますな」「ウム」「あれに南無阿彌陀佛といふのもあればナンマイダ〜といふのもあります、あれは如何な譯でございます」「夫れは貧道は知らない、勝手にやるんだから能いではないか、それも是れも考へて置かう」「新左衛門先づ好い鹽梅だ、禪師を負かしたと腹の裡で欣んで歸らうとすると、禪師が「あゝ新左〜」と聲をかけた「禪師お呼びなすつたか」「否え」「左様でございますか御免被ります」行かうとすると禪師が又「新左衛門」と聲を掛ける、立止つて「お呼びになりましたか」「呼びはしないよ」「左様でございますか、

テハ又伺ひます」新左衛門變に思ひ乍ら行かうとすると又た「コレ〜」蜷川々々「聲が掛つた」「御呼びになりましたか」「何故」「テモ只今蜷川々々と仰有いましたが」「アハ、實は呼んだよ、併し新左、貧道が最初新左々々と呼んだら返事をした、新左衛門と呼んでも返事をした、又蜷川と呼んだらヤツパリ返事を仕た、ソレ見なさい、百萬遍で南無阿彌陀佛といふのもナンマイダといふのも同一道理ぢや、究竟何うでも好いではないか」「こりや恐れ入りました」「分つたか」「分りました」「それではお歸り、貧道も其内往く」「有難うございます、御出で下さいませすのは何日頃でございますか」「然

うさな

暗の夜に鳴かぬ鴉の聲聞けば

生れぬ先の父を戀しき

其内に往かう、併し其方の住居は「鷹ヶ峰と申して是れより半里ばかり西へ寄つた處でございます」「あゝ左様か、どうしても貧道は西へ行くのが好きだ、それでは新左衛門明日往くよ」「明日お出で下さいますか」「イヤ昨日往くとしやう」「へえ」「昨日往くよ」「御免被ります、左様なら」と新左衛門口の内でブツ／＼云ひ乍ら立ち歸りました。

一三 女病人を拂子で滅多打

新左衛門或時慌だしく大徳寺へ来て案内もなく禪師の居間へ通りました、是れは平生新左だけは取次は要らぬからと許されてゐるからだが、恰度此時禪師は茶を入れて服んでゐました「禪師御機嫌宜しう」「オ、新左か慌だしい何ぢや」「今日は取別け少々お願ひがあつて出ました」「何ぢや」「他でもございせんが、宇治の黄檗の下の郷に森田金太夫といふ手前の縁者がございまして、却々の金満家ではあります其娘が奇病に罹り、只暗い所でメソ／＼泣く許りで醫者

にかゝるのを嫌ひ、モウ今日では危篤でございます。「それは氣の毒
 ぢやな「處が其娘はどうも懷妊らしいのでございます」「ふむ「併し
 今日まで決して男の傍へも寄つた事が無いので如何にも不思議でな
 りません「成程「就きましては甚だ恐れ入りますが貴方に御出を願つ
 て、それが果して懷妊であるか或は物怪の祟であるか一つ御覽を願
 ひたいと存じまして出ましたのでございます如何でございませう
 か「うむ好しく往つて遣らう、病は醫者の預る處で一休には分ら
 んが兩親が可哀想だ、今往く先きへ往つて待つて居れ「お供致しま
 せうか「イヤこれから茶漬を喫べて往く「左様でございますか、デ

ハ何分願ひます」新左衛門も禪師の氣性を知つてゐるので先に歸つ
 てゐると、暫くして金太夫の玄關へ鼠の法衣を着た汚ない坊主が草
 鞋を穿いて来て「頼む、頼む」と聲をかけた、取次が乞食坊主と誤
 つて追拂はうと仕てゐる處へ、新左衛門が出て来て「是れは禪師恐
 れ入ます」と平伏したので取次は吃驚して逃げて終つた、奥へ通る
 と金太夫夫婦も欣んで御禮を云ふ、其處には醫者らしい坊主が七八
 人居て禪師に黙禮しました、處が病人の娘はどうしても禪師に遇は
 ない、金太夫も窮つてゐると禪師は是れを見て「是れは物の怪の祟
 だ捨置かつしやい」と云つて家内を調べると同家に篠崎といふ三十

二三の歌詠が逗留してゐる、何うも様子が怪しい「新左衛門貧道はあの篠崎といふ者が怪しいと思ふ晩になつたら其方と二人で娘の病室へ往つて調べやう」「何分願ひます」乃で禪師は金太夫や新左を對手に四方山話をして日の暮れるのを待ち、九つ頃（十二時頃）になると「新左さア參らう」「承知致しました」禪師は新左衛門と二人だけで娘の病室へ往つて今入らうとすると「ア、厭だく阿父さん阿母さん坊主を入れて下さるな」と襖の内へ娘が細い聲で切りに云つてゐる、禪師襖を開けて入り凝と様子を見てゐたが、突如苦しんでゐる娘の襟髪を把つた。新左衛門は驚いて止めやうとするのを「新

左捨置け」といひ乍ら其處へ娘を引据ゑ「如是畜生發菩提心南無阿彌陀佛々々々々々」と稱名を唱へ持つてゐた拂子で五六度娘の脊を打つと、娘はキヤツと叫んだが物凄く禪師を睨んで其場へウムと悶絶しました。新左衛門は驚いて「これはどうも怪しからん、恁様な病人を打擲遊ばすとは禪師様にもお似合なさらん」と間諛々々して居る、禪師笑ひ乍ら「新左心配するな、貧道は病人を打つたのではない、此娘は狐狸に憑られてゐるからそれを打つたのだ、モウ狐狸は退散して娘はよく睡てゐるから眼が覺めたら醫者に頼んで薬を飲ませて遣れ」其儘にして茶の間へ來て「コレく金太夫「ハツ

「モウ娘は全快致す安堵するが好い、一體狐狸などいふものは人の虚に乗じるもので、娘が篠崎と通じて懐妊した隙に古狸が憑いたのだ、モウ大丈夫だから安心しなさい」金太夫は勿論親類縁者も歡んでゐると果して娘の病氣は癒つたので新左衛門は吃驚して終ひました。

一四 白禪に野晒し姿で盆踊

京都には其頃盆踊りがありました。毎年七月十五日から八月一日まで、山城の大瀧といふ土地へ八十間四面の竹矢來を設へ、是れへ

將軍家が御出でになつて盆踊を見物する慣ひであるが、年々の事ゆる町々の者が種々工夫し、上覽の時にお褒めの辭を頂かうと大層な趣向を致します。禪師是れを苦々敷い事に思ひ、何うも良くない事をやる、上の樂みは即ち是れ下の難義である、困つた事を爲るものだと思つてゐる處へ、紅甚、竺齋、錢久杯といふ例の禪學連中が來ました。「お、恰度好い、今日は一つ大瀧へ盆踊を見に往かうと思ふ、貧道はまだ見た事がない、どうだ供をして呉れないか」「へえ御供は致しますが雜當致しますからお見合はせなさいまし」「ナニ關はん、ちやア往つて貰ひたい、紅甚其包みを背負つて往つて呉れ」「中は何

でございます「何でも好い彼方へ往けば分る」「は、あの禪師様何か御趣向だと見えますな」「ア、左様だ、今日は汝達も一緒に踊るんだ」「それは御免を被りませう私は當年六十八でございます「幾歳でも關はん踊りなさい、世の中に踊位る面白い事はない」仕方がないから一同随いて往く。モウ日がつぶり暮れてゐます。往つて見ると成程人の山を築き、室町將軍義持公は紫地の幔幕を張り。金屏風を立廻した棧敷にお控へになつて、お側には重臣が夥多居流れてゐる。其内逐次町々の者が繰込んで愈々益踊が始まりました。中には加茂川染の衣裳を着たものもあれば、男が女の扮装を仕てゐるもの

もあり、各自好みの服装で懸命に踊つてゐます。禪師は人込の中に立つて是れを覽てゐたが「イヤ始まつたな、却々盛んなものぢや。是れは面白い紅甚その包みを出してお呉れ」「何うなさいます」「貧道が踊るのだ」「御串戯仰有つちや可けません」「ナニ關はん、面白いから貧道も踊る、其積りでチャンと支度して來たのだ、開けて見なさい」「紅甚が開けて見ると御自身で白木綿へ罽體を描いた衣裳が十枚ばかり入つてゐました。禪師はそれを着て白木綿の三尺を締め、白木綿の手拭で鉢巻をし、豫て用意の拍子木を取出し「サア、紅甚も竺齋も鉢巻をして踊つてお呉れ」と云ひ乍ら、大勢騒いでゐる中

へ飛込ました處が一同派手な中へ此野晒し姿で飛込んだのだから眼に着きます。禪師は故と將軍家の前へ出て、

竹を切るなら心せよ、溜りし水を溢すなよ。手荒くすれば濁るぞよ、切らずに置けば出さず入らず、世に彌之助の袖に露（彌之助といふは其頃の放下師）片々寄らず二合酒に握り飯、親身貧苦も常の事、少し飲んだら薬のものよ、それも過ぐれば毒となる、水は尾花を好むぞや、水と尾花と契るなら、明日を契りて末まで遂げよ、秋の紅葉は薄いが散るか、色の濃いのが先に散る、人の真似する鸚鵡でさへも厭ぢやと見えて真似もせず（中略）笛や太鼓

の盆誦、貴方のお氣に入るやうに、猫も杓子も出て踊れ、南無阿彌陀佛ヨイヤサ。

大きな聲で謡つてゐる。將軍家は是れに眼を留め「コレ／＼あの拍子木で調子を取つて踊る坊主は何者だ」此時不圖氣の附いた重役が「恐れながら申上ます「あれは大徳寺の一休禪師にございます」「ナニ禪師とな……」見る／＼義持公の顔は蒼くなつた「コレ一同の者子は立歸る」道がは將軍家それと覺つて逃出したが、其後奉行から盆踊以來廢止の御沙汰が下りました。

一五 蓮如上人コロリと參る

一休禪師或年の節分に錢久の許を訪ねると、錢久大層欣び「是れは禪師様宜う御出下さいました、今日は恰度節分ですから御酒を一献差上げたいと存じます」「さうかいそれは有難う、だが節分に豆を炒るのはありや一體怎麼いふ譯だい」「それは存じませんが節分には豆を撒きますのでございます」「アハ、困つたものだ、打角だが貧道はさう云ふ處を好まんから又來やう」「デハございませうが少々御待下さいまし、併し禪師様節分に豆を撒きますのは悪うございませ

うか「それは悪い譯は莫らう、だが豆は炮烙で炒るのだな」「左様でございませす」其時禪師は、

ほうろくは同じ火宅の人心

氣をいゝるもありはうするもあり

これく錢久、節分に悪魔外道を追拂ひ西の海へサラリくと能く申すがな、さうく西の海へばかり悪魔外道が追拂はれたら、西の海は悪魔外道で填るだらう、豆を撒かないで豆を煮て食つた方が好いな「左様でございませすかな」「其内また來やうハイ左様なら」其足で直ぐ大谷本願寺へ出掛けて立關へ蒐り「頼む、頼む」番僧それへ

出て見ると汚ない坊さんが佇んでゐる。「何方から御出なさいました
 「彼方から来たよ」「へえ何方から」「彼方から」番僧も驚いてゐると
 「蓮如さんは居るかい」番僧愈々驚いたが丁寧「貴方は何誰さま
 でゐらつしやいます」「新樹庵から参つたよ」儲はと思つて平伏す
 ると「蓮如さんは居なさるだらうね」「ハイ只今晝の御看經中のござ
 います、此方へ御通り下し置かれ少々御待ちを願ひます」番僧が書
 院へ導かうとするのを。禪師は委細關はずズと本堂へ通ると、
 蓮如上人切りに經を讀み、二十名ばかりの僧侶が東西に居流れて仍
 且讀經して居ります。ツカ／＼と夫れへ進んで「蓮如さん／＼貴方

は何を爲て居なさる」と聲を掛けると、蓮如上人其聲に驚かされて
 ヒヨイと回顧つたが、見ると一休禪師だ「おや禪師宜うこそ御越な
 された、書院で休息して下さい」「イヤ／＼關はつしやるな、蓮如さ
 ん御坊は今何をしてゐなさる」「米櫃の掃除をして居ります」「ア、左
 様か、阿彌陀といふものは全體何の爲めに置きますかな」「これは異
 なお訊ね、あれは看板でござる」「ウム承はれば蓮如さん御坊は大層
 魚肉を喰る相ぢやな」「イヤ野訥は食はんが佛が好みませ故是れへ送
 ります」「成程、御坊の名を蓮如といふのは露の如しといふのでござ
 るかな」「左様でございます、蓮の葉の濁りに染まぬ心を旨として命

けましたのぢや、

白露の己が姿を其儘に

紅葉に置けば紅の色かな

即ちこれでございます」茲で少時兩僧の對話がある一休禪師は筆を執つて、

蓮の葉の濁りに染まぬ露の身は

只その儘に蓮如實相

と記される。上人もニツコリして、

佛とて外に求むる心こそ

迷ひの中の迷ひなりけり

とやる。禪師は暇を告げて還らうとする、上人は留めたが肯かないでフイと立上つた。上人は禪師の袖を控へ「禪師、今歸ると仰有つたが何處へ歸られる」禪師少し弱つたが少時して「思ひに委せ風に連れて立歸る」と答へる「ハ、ア若し風なき時は「その時こそ」とベツカツコをして「天地は絶へず運動を續けて一刻も休む時なし動くは風降るは雨、息が通はねば忽ち死す」と云つたので、上人頭を下げて「恐れ入りました」

一六 御影堂で一休扇の早書

大徳寺の門前に御影堂といふ扇屋があつて爺さん媪さんの二人暮し、子も無ければ親類も莫く至つて暢氣なもの、しかも二人共誠に結構人で心掛もよく、儲けた錢は佛の事や種々の善根に遣つて生計は餘り餘裕でない。禪師は恚う云ふ人物が至つてお好き、殊に老人夫婦の事とて平素格別の御最負、二人も亦禪師の徳を慕つて朝夕御機嫌伺ひに出て、禪師を渴仰し、何時とはなく此爺さんも禪學を味はふやうになつて來たので、禪師も爺さんの來るのを樂しみにして

85 一 休 和 尚

あると、何うしたか二三日姿も見せず、一日悄然としてやつて來ました「禪師様御無沙汰いたしました」お、老爺何うした、二三日些とも顔を見せなかつたが風邪でも引いてゐたか「ハイ否え別に風邪も引きませんが種々用事がありましたして御無沙汰致しました、就きましては禪師様、媪アと二人で永々御世話様になりましたが、京師の住居も氣骨が折れますから、世帯を疊んで二人共在所へ引つ込まうと思ひ、今日御暇乞に出ました「お、夫れは名残惜しいな、在所とは何處であつたかな」讚州丸龜在でございます「ほう然うであつたな、まあ〜今日はゆつくり遊んで往きなさい、モウ遇はれんとな

ると貧道もお前と茶でも飲んで一日話を仕たい、寛りして往きなさい
 い「唯、思召は有難うございますが種々用事がありますので然うし
 ては居られません、媪あさんは後刻御暇乞ひに出しますが、私はモ
 ウ伺へません随分御機嫌宜しう」悄然として歸つて行く様子が餘程
 訝しいので、禪師は哲梅に命けて、御影堂の様子を探らせると、老
 人夫婦で碌に商賣はなし、積り積つた借金に遣り切れなくなつた爲
 めと判つたので「好しく貧道が一つ彼所の借金を返して遣る」と
 禪師は平氣なもの、後とも云はず出掛けて往くと爺さんは愕いた
 「これは禪師様ようお出下さいました、只今はお邪魔致しました

「お、老爺、貧道は汝に頼みがあつて来た「何でございます」「貧道
 を此家の養子にしてお呉れ」「え、養子に、御申戯を仰有つては窮り
 ます、第一貴僧を食はせる事が能ません」「ナアニそれは心配は要ら
 ん、貧道が自分で稼いで食ふ」「デモ貴僧を養子といふのは誠に窮り
 ます」「まア能い貧道は今日から養子だ、養子になれば汝は貧道の父
 だ大切にしなければならん、貧道は早速店へ出て商賣をする」「禪師
 様御申戯を……」と云つて老爺は面喰つてゐると、禪師は委細關
 はず「父つアん墨を摺つてお呉れ」と墨を摺らせ、豫て用意して來
 た白木の板へ「一休御影堂の養子となりたる披露として白扇御求め

の仁へ今日一日御望みに委せて揮毫可致候、但し無料にて」と認め
て表へその看板を掲げ、禪師は店頭へ毛氈を布いて端然としてゐる。
さあ忽ち是れが評判になつた。平素禪師に揮毫をお願ひしたくとも
傳手が無いので困つてゐる人も尠くない、ソレに今日御影堂で扇を
購ひさへすれば其場で書いて下さるといふのは有難い事だと、イヤ
出たわく三町四方往來も止る程な騒ぎ、處へ蜷川新左衛門が人を
押分けて來た「禪師何事でございます「うむ實は云々だ、新左衛門
墨を摺つて呉れ「畏りました」寺社奉行が墨を摺る役で、禪師が片
つ端から揮毫するのだから扇も賣れる譯、百本や二百本は瞬く間に

賣れ盡して爺さん仕入れに面食つたが、夜に入つて勘定して見ると
一朱位ゐの扇へ一分も二分も置いた人があるので、二百兩許り儲か
つた、禪師莞爾して「お父つアん是れなら故郷へ引込まなくとも宜
らう「唯「それなら貧道を離縁してお呉れ」

一七 怪しの修驗者縮み上る

寺社奉行蜷川新左衛門隱居の願かなひ、家督を忤へ譲つて禪師の
門に入りました素より御氣に入の新左衛門、師弟の情は愈々濃かに
禪師も折々新左衛門の許へ御出になれば新左衛門も始終新樹庵へ參

つて居ります。處が茲に伊勢國關の城主に大貝濱之丞といふ有福な大名がありました、妻に死別れて間もなく最愛の次男を失ひ、只鬱々として暮して居るので、家老永島徳右衛門以下の重臣が心配し、領分の天臺宗寶藏寺内へ一字の堂を建立し、是れに地藏尊を安置する事となり、この地藏尊開眼を一体禪師へお頼み申さうといふ相談調ひ、徳右衛門態々上洛して禪師に頼み、禪師も快く承諾し、大宮參拜旁々新左衛門を伴つて伊勢へ行く事となりました。大津から船へ乗ると乗合は十七八人居る、偶その中に骨格逞しい修験者が居てヅカ〜と禪師の傍へ進み「オイ坊主々々」と呼んだ。無禮な奴

とは思つたが禪師は回顧いて「何か用かえ」「貴僧は何宗だ」「禪宗だよ」「然うか、それなら話相手になり相だが、ヤツバリ磐若湯を飲んだり魚肉を食ふ仲間だらう」「ハ、ア然うかも知れない」「して見るとヤツバリ生臭坊主だな」「うむその生臭坊主だ、併し酒や魚は貧道が飲んだり食ふのではない佛さまが召上るのだから關はんよ」「この坊主面白い事を云ふ、それでは一つ船中の楽しみに拙者の法力と其方の佛力と何方が勝るか腕比べをして見やう」「ウムそれも宜らう」船中の者は欣んでゐる。スルト禪師は「修験者、それでは汝から先に法力を見せなさい、貧道も佛力を見せるから」「宜しい其儀ならば」

と件の修験者は珠數押揉んで一心に祈を上げると不思議や浪の上に繪のやうな不動明王の姿が現はれる。乗合の者が驚いて居ると一休禪師は「ウム豪いな、豪いが貧道はそれを直ぐ消して見せる」と云ひ乍ら傍らに置いた杖を取ると浪の中へ突つ込んでチャブ〜と掻廻したので、不動明王の姿は消えて失つた「無法の事を爲るな搔廻せば消えるに定つてゐる」修験者は慍つたが禪師は平氣で「さう慍るな消えさへすれば宜いではないか「おや此の坊主奴」と云ひ乍ら又祈りを上げると、倏忽ちの内に烈風吹起つて浪は逆巻き船は覆へらうとする有様となりました乗合の者は「御出家さん謝つて下さい

貴方が無法な事を仕たので修験者さんが慍つたのです」と騒いでゐる、禪師は「ナアニ心配さつしやるな船は覆りはしない大丈夫着く所へ着くから」と澄してゐると成程間もなく船は思ふ處へ着いた。皆々不思議に思つてゐると修験者は眞赤になつて憤つた「坊主々々船中では思ふ様な事が能ん陸へ上つて法力と佛力を比べろ「あいよ」禪師は猶も沈着いて陸へ上ると、數多の犬が修験者を取り巻いて吠る、修験者は「己れ〜」と云つて睨むがモウ咬み付きさうになつてゐる。禪師は「貧道が一つ止めて見せやう」と云ひ乍ら袂から菓子を出してやると、犬は欣んで菓子を食つてゐる。禪師は笑ひ乍ら

「修驗者見さつしやい此通りだ、法力も佛力も歸する處は是れだ、世の中の事は何に依らず然うムキになるものではない。貴様の風采を見ると三寶院派の法を賣る山伏と見た。是れからもある事だから氣を附けなさい」どうも様子が異ふので修驗者は凝と顔を見てゐると、先刻から故と離れて様子を見てゐた新左衛門がツカ／＼と寄つて「コレ修驗者、大徳寺の一休禪師様だぞ」と云つたので修驗者は遙か後へ飛退つて「へ、へー」

一八 御師に借りては押借だ

禪師伊勢の大貝方へ到着すると却々の款待です。殿を首め家老永島徳右衛門其他の重臣にもお遇ひになつて地藏堂建立の相談あり、禪師指揮の下に徳右衛門が奉行を承はり、是れも禪師の指圖で京都の佛師閑慶の弟子金吾といふ者を呼下し、是れに地藏尊を刻む事を命せられ、禪師は兩三日滞在の後新左衛門を連れて伊勢參宮に出立しました。歸路に開眼をする約束を結び、偕山田へ入ると御師の者が十四五名迎ひに出て居ります。是れは豫め大貝方から知らせたものと見えて丁寧に待受けてゐました「エ、少々伺ひます」新左衛門振返つて「何だい」といふと「エ、手前は御師の鶴太夫でございま

すが京都紫野大徳寺の一休禪師様が御出と承りまして御迎ひに出て居りますが、まだ御着ではございませんまいか、御存知なら御教へを願ひます」禪師ニコ／＼笑つて「ア、まだ御着にはなるまいよ」貴僧は禪師様の御弟子ではございませんか「然うた」御名前は「休一」「へえ」「分らん奴だ休一だよ」「左様でございませるか禪師様は餘程遅れませうかな」「然うさマア五六年は遅れるだらう」「御串戯仰有つちや可けません、私共は神官の差圖に依つて御出迎ひを致して居りますもの、どうか眞實の事を御教へを願ひます」禪師ニコ／＼笑つてゐる、新左衛門少し氣の毒になつたので「コレ／＼汝と話しをして

ゐらつしやる方が禪師様だ今途中で一寸轉んだから休一と仰有つたのだ、龜相の無いやうに致せ「ウヘー」鶴太夫は吃驚して早速お伴ひ申し、家内へも命けて、丁重に収扱ふと、禪師それが窮屈で耐らない「新左衛門や、恚うして御師を食倒すのも本意でない、何處ぞ別に宿を取つて同宿の者の話でも聞く事にしやう」「それが宜しうございます」翌朝態よく立出でこつそり參宮を濟ませ、其夜は人の氣の附かぬ處へ泊つて、漸次松阪の方へ御出になると若い者が大勢集つて力持を仕てゐる。禪師其處を通り蒐つたが「新左見ろ、鬼のやうな男が力持を仕てゐる、豪いな」と云ひ乍ら、

大石を揚げる力は一と盛り

胸の力は孫子末代

と大きな聲でやると、新左衛門も、

大方は學者の智慧は附焼刃

持つたる智慧を磨きたまへや

とやつた。中には少しは文字を解する者が居て、是れを聞くと突如「オイ〜皆んなモウ止せ汝達が大きな石を自慢さうに差揚げてゐるものだから御出家が嗤つてゐらア力業は若い時一と盛りだモウ止して智慧を磨かう」忽ち止めて終ひました。禪師感心してそれから

白子觀世音へ參詣し、今二町ばかり來ると、袴を穿いた男がバラバラと駈けて來た「コレハ〜只今御着様でございますか「お月様がどうか仕ましたか「御申戯を仰有います、貴僧は禪師様でゐらつしやいませう「早いもんだ露れたかえ「ハイ御領主から御觸れでモウ大抵それとお察し申しました、サア御案内致しませう「イヤ辱けないがそれは窮る、山田で御師の許へ厄介になつたが逃出した位ゐだ、折角だが斷るよ、併し物は借りて來なかつた御師から借りると押借だからな「御申談を仰有います、サア恁う入らしツて下さい「お役人それは斷るよ貧道は窮屈が大嫌ひぢやから「デモ落度になります

から「イヤならんやうにするから勘辨してお呉れ」ではございますが私共が叱られますから「さうではあらうが役所や本陣へ連れて行かれると耐らんからな、平に御勘辨を……コレ新左お頼み申せ」新左は御氣性を知つてゐるので固く斷つた、役人も我を折つてそれではといふので分れると禪師ホツト息を吐いて「新左恐ろしい目に遭つたな」

一九 心に惚れよ人に惚るな

其内に日は暮れた、新左衛門甚く疲れた様子で「エ、禪師様、手

前は甚く草疲れました「貧道も草疲れた、何處か泊る處はないか」「たしか此村外れに寺子屋がございます」「寺子屋かい、それは宜い其處へ一つ泊めて貰はう」漸く辿り着いて「少々お頼み申す、エ、お頼み申します」幾ら聲を掛けても返事を仕ない。旋てのことに「何誰でございますか手前共には少々取込がありますから「イヤ然うでもあらうが腹は減るし疲れて誠に難澁してゐる、何うか一晚泊めて貰ひたい」「モウ十町お出になると宿屋があります」「どうして十町どころか一町も歩けない、何うか是非泊めて貰ひたい」無理鎗に泊ると成程内では夫婦喧嘩を仕てゐる「ヤイ此三平二満め」「オヤ三

平二満と云つたね此鹽吹め「何が鹽吹だこの盤若め」何が何だか分らぬが切りに喧嘩を仕てゐる、禪師は苦笑ひして「新左衛門や」「はい「面白い處へ泊つたな、苟も他に學問を教へる身が夫婦で罵り合ふとは何事だ、苦々しいではないか」「左様でございます」禪師筆を執つて、

名を聞けば仁義五常を教へる身

身持不埒で口は發明

と障子へ落書をなすつた「新左何うだ面白からう」「へえ成程」氣樂な人もあるもの夫婦喧嘩の中で落書を仕てゐる。其内隣りの人か何

か來て仲裁し、喧嘩は辛く止んだ。新左衛門其場へ出て「コレ〜御亭主、喧嘩が納まつたら風呂へ入れて貰ひたい」「宅には風呂なんぞございませぬ、全體泊めないと云つたのを無理に貴所方は泊つたんだから、夫婦喧嘩でも仕てゐたら仲へ入つて下さるのが當然だ」「オイ〜是は驚いた、それなら最初から只今夫婦喧嘩を仕てゐるから何分お願申すと頼めば能いのに「氣樂な事を云つては可けません」「まア仕方がない、それでは何か食物を頼みたいな」「御氣の毒様だが宿屋ではないから食事までは届きませぬ、それで悪けりや他所へ御出なすつて下さい」「禪師是れを聞いて「新左、随分無愛想な奴

ぢやな、是れは此家へは泊まれない、女房も不縹緻ではないが所夫の方が容貌が美しい、ハ、ア是れは女房が先の所夫に死別れた後の入聲だ、道理で喧嘩の最中所夫が、這麼處へ来るのぢやないが貴様が無理に頼んだから来て遣つたのだと申して居つた、新左往かうか「其方が宜しうございます、風呂は無し食物は食はして呉れず遣り切れたものぢやございませぬ」好し出立しやう、それでは汝鳥渡断つてお呉れ「へえ一畏りました、コレ〱御亭主折角泊めて貰つたが都合に依つて夜道をかけて出立するよ」怎麼でも勝手になさいまし」其儘禪師は新左衛門と共に出掛ける。後で夫婦が「ナアおい、

何だらうあれは、他の家へ無理に泊つて相當の物も出さず横柄な事を云やアがつて面の憎い奴等だ「ホントニ圖々しい人達だ、オヤお前さん壁に何か書いてあるよ」ヤ樂書を仕て往つたな、まだ遠くは行くめえ、引ツ捉へて掛合はなきやならねへが、一體何を書いて往つたんだらう、

不縹緻な者と思つて侮るな

心の中は辨財天なり

死に後れ又の夫を持つととも

心に惚れよ人に惚れるな

忌々しい奴だ、汝と乃公の事を書いてある「お前さんくその名前
 書を読んで御覽「ナニ一休、サア大變だ、領主様から御觸れの廻つ
 てゐる禪師様だ「エツ大變な事を仕て終つたね「サア來い追つ掛け
 て往つてお詫びをするから」夫婦はドン／＼追ひ駈けて來ると、辛
 く五六町先で追ひ着いた「エ、少々伺ひますが禪師様でゐらつしや
 いませうか」禪師は笑ひ乍ら「分つたかい新樹庵の一休だ」夫婦は
 平蜘蛛のやうになつて「何うも相濟みませんツイ手前にかまけまし
 て」と詫びると、禪師カラ／＼と笑ひ「是れからはあんまり手前に
 かまけなさんな」

二〇 地藏尊の頭上へ大小便

關の大貝家ではモウ充分に地藏尊が出来上つた。只管禪師の歸來
 を待つてゐる處へ新左衛門を随へて歸られる。二日の間大貝家で疲
 れを休め、愈々開眼といふ事になりました。豫て此噂を聞知つたる
 近郷近在の人々は、佛果菩提の爲めに禪師の有難いお經を伺ひたい
 といふので、當日は朝來數千の人々が關の宿狭しと出掛けて來まし
 た。大貝家にては路次を嚴重に警固し、寶龍寺内が式場には假家を
 設へ棧敷を設け、幔幕を張繞して沈香を燻し、程よき處には當日の

施主たる關の領主大貝濱之丞着座し、重役は勿論家臣一同居流れる、其内禪師の輿物が着く、墨染の衣に錦の袈裟を掛けて水晶の念珠を爪繰り、輿脇には麻上下着用の蜷川新左衛門が附添ひ静々と式場へ入つて來ました。濱之丞首め嫡子甚内及び家老徳右衛門等それへ出迎へ一通りの挨拶があつて禪師は休息される。其處へ甚内は進み出で「禪師様へ伺ひます」「何ぢやな」「この地藏尊を祀りまするのは如何なる所以でございますか」「それは餓鬼畜生地蔵修羅天上人間この六道に象つたのぢや別段難しい事を云はんでも宜らう」「ハイ」愈々開眼といふ事になつた、數千の人々は聲を吞んで只森としてゐる。

禪師ツカ／＼と地藏の側に進んだが「イヤ地藏妙な顔を仕て居るな、只今一休が開眼を仕てやる、六道能化の地藏尊、人を尊み亦能く利益を與へなければならんぞ」と云つて地藏の前へ起ち更に大音を揚げ「爾元來他山の石なり、縁あつて地藏となる、我是娑婆以來の佛を拜せよ」と云ひながら前をまくつて突如地藏の頭上へシヤア／＼小便をした、一同は呀と驚く、施主濱之丞は色を失つてゐると、若年の甚内は前後の思慮もなくツカ／＼と來て禪師の袖を捉へ「狂ひ玉ふか禪師、六道能化の地藏尊開眼の席に來つて人もなげなる振舞、不肖乍らも伊勢國關の城主大貝濱之丞の忤甚内、御返答に依つては

其分には捨置かれませんか」と刀の柄に手を掛けた。新左衛門も驚いたが徳右衛門も吃驚して漸く甚内を宥めると、禪師は新左衛門に向ひ「新左往かう折角頼むから態々來て暇を潰し充分に開眼すれば此有様だ、全で狂人同様手も附けられない」何方が狂人だか分らない。袈裟衣を脱いでドン／＼往つて終ふ。後は大層な騒ぎ、大勢で地藏を洗つてゐると不思議や地藏へ手を附けた者が悉く氣が變になつた。これは何れ禪師に深いお考へがあつたに違ひないと濱之丞自身乗馬で十四五名の供を連れ、桑名まで禪師を追ひ駈けると首尾よく追ひ着いた。徳右衛門も其中にあつて諸共禪師に散々詫びる、濱之丞は

禪師を三拜し「禪師様には何か深き思召があつて地藏の頭へ尿を遊ばしたのに相違ござらぬに忤甚内若氣の過失より飛んだ無禮を加へ何共申譯なし平に御容赦あつて御怒りをお鎮め下されたく」と物が甚だ變ではあるが、是れは地藏に手を觸れた者が悉く氣が變になつたのを地藏の崇と心得た衷心からの詫び言に禪師は無造作に承知して「あゝ然うかい、ナアニ貧道は怒りも何うも仕ないが、兎角地藏といふものを軽く思ふから可かん、貧道にも少し思ふ事があつたがそれは云ふまい、精々信仰さつしやい」と云ひ乍ら犢鼻褌を脱つて徳右衛門に渡し「是れを地藏へ冠せれば崇が除れる」徳右衛門少し

馬鹿々々しくなつたが早馬で還つて云はれた通り地藏へそれを冠せると變になつた者が皆癒つた徳右衛門惘れて「地藏馬鹿にしてゐる」豈夫然うも言はなかつたでせう。

二 乞食坊主と人は云ふ也

禪師愈々三河路へ入りました。彼の杜若の名所として遠江に其名を知られてゐる八ツ橋村の或茶店へ腰を卸し「茶を一杯お呉れよ」「御出なさいまし」「老爺や」「ハイ」「此近所に宿屋はないか」「半里も行かなきやありましねえ」「窮つたな」「御出家様えらく草臥れさしつ

たやうだね」「あ、草臥れたよ何處か泊めて呉れる處はないか」「左様さね、名主様が宜かんべえ、是れから一丁往くと熊太夫といふ庄屋さまがあるだ其處へ往かつしやい」「ナニ熊太夫、庄屋か、併し老爺ヤツパリその熊太夫は色が眞ツ黒で、喉に月の輪があるかい」「ナニ那樣ものはありましねえ」「アハ、老爺それは串戯だ、新左衛門其處へ頼んでお呉れ、老爺此處へお茶代を置くよ」「氣を附けて往かつしやい」来て見ると可成手廣い住居だ。新左衛門先に立ち「お頼み申す」「ハイ何だね」「庄官熊太夫殿は此方かな」「ハイ俺が熊太夫だよ」見ると六十有餘白髮交りの頑丈の老爺「何しに來なすつたい」「我々

は諸國を遍歴致すものだが今日泊り損じ殊に同伴は足を痛めてをり
 ます何うか一泊をお願いしたい「は、お折角だが御断り申す」「そり
 や又何故でござる」「實はな近頃村が物騒なので旅の者は一切泊める
 事はならぬと俺が觸れを出しました、その俺からして見ず知らずの
 者を泊める譯には可かん、御断り申す」「禪師是れを聞いてゐたがッ
 カ〜と前へ出て「汝が熊太夫かい、頼むから泊めてお呉れ、決し
 て物を盗むやうな者ではない、又見た處盗まうといふ品物もない
 「御出家串戯ではない、無暗に他の家を見ては可けません」「さうか
 それは悪かつたな、併し熊や泊めてお呉れ、名主庄官といふものは

難儀なものは泊めるものだ、貧道等は決して贅澤を云はない、三界
 無庵樹下石上を宿とする出家だ旨い物であれば宜しい、寢道具も悪
 くさへなければ何にも云はない、菓子も不味いのは可かん」熊太
 夫驚いた「断りますよ、此乞食坊主は些し狂れてゐる」「アハ、狂
 れてゐても何でも關はん、泊めぬと云つても是非泊まるよ、新左草
 鞋を解いてお呉れ「畏りました」新左衛門は禪師の草鞋を解く、其
 處へ女房が来て夫を取做し兎も角泊まる事となつた、禪師は一向
 平氣で座敷へ通り「コレ熊太夫腹が空つてゐるぞ」熊太夫忌々しい
 と思つたが「飯は今炊いてゐますよ」「早く食はせろ」熊太夫ポンプ

ン怒つて居る。其處へ村内の與吉といふ百姓が來ました。是れは以前禪師がまだ宗純の時分大徳寺に飯炊を仕てゐた者で能く禪師を知つてゐます「名主様、御客様でございませうか」「オ、與吉か、ナアニ御客ではないが云々だ」と理由を話すと、與吉が「ハテナ」と云ひ乍ら奥を覗いて吃驚した「名主様大變だ、俺も關の地藏様の話を聞いてゐるから實は御出家の様子を見に來たいが、彼の方は大徳寺の禪師様でがす「それは大變、與吉怎麼しやう、事に依ると庄官を退役させられ縛られて京洛へ差立てられるかも知れない」「さうだね、御前様のやうに小前の者に厳しい人は差立てられた方が好かんべえ」

熊太夫飛んだ處で油を取られる騒ぎ、與吉が熊太夫に頼まれて障子の敷居越しに手を突くと禪師是れを見て「何だ汝は」「ハイ私は與吉と申しましてまだ貴僧がお小さい頃大徳寺様へ御奉公致しました者にございませう「ウム左様々々與吉老爺まだ生存かえ」「有難うございませう、就きましては熊太夫でございませう」とこれから段々先刻からの無禮を詫びると、禪師は素より熊太夫が宿を斷つたのでホンの擲掬つた事に過ぎない故無造作に御宥しなさる、熊太夫もそれへ來て散々に詫びると、禪師笑ひ乍ら「どうぢや熊太夫今晚何か盗まうか」

二二 子が無いで孫が生るか

禪師 海道を氣委せに歩いて藤川の宿外れまで来ると少し空腹になつた「新左何刻だらう」「モウ午刻でございませう」「晝食を仕やうかな」「宜しうございます」「あの角の茶屋が宜らう」「御案内致しませう」「入つて見ると齡七十位ゐの老爺が啣へ煙管を仕てゐる」「老爺晝食が出来るか」「出来るよ」「さうかでは早い物で一つ頼むよ」「御出家と御二人かえ」「左様だ」「今孫が戻つて来るから待ちなさい」「老爺それは困るな表に看板を出して置き乍ら孫が戻らなければ支度が能な

119 一 休 和 尙

いのか「御武家さん那樣無理を云ふものではない、俺は隠居だ、隠れて居べきものがしやくり出ちや悪からう」「禪師は後の方で聞いてゐたが「新左々々面白い老爺だ、孫の戻るまで待つてゐやう、コレ老爺さん孫は何處へ往つた」「何處へ往つたか分らない」「何時歸る」「それも分らない出ると二日位戻らない事もある」「そりや窮つたな新左待つつかい」「如何様共思召次第で宜しうございます」「然うか、それでは面白い老爺だから待たう、當月一杯には晝食が能るだらう、老爺好い天氣だな」「あゝ天氣だね」「庭のこの松は大層古いが何年位ゐになるな」「然うさな、俺が生れた時に植ゑた松だから千三百六十

五年になる「老爺少し待て、さうすると汝の齡は千三百六十五か

「あゝモウ位になるだらう」「ふむ面白いな 汝は農か」「あゝ農

だよ」「今孫があるといつたが子供は無いのか」「御出家無駄言いはつ

しやるな、子が無くて孫が出来るものでねえ」「分つたよ、その子供

は何うした」「新家の方に居る、此の家は孫が稼業を仕てゐるのだ

「孫は幾歳だ」「俺より五つ六つ上だ」「ふむ左様か、新左餘程可笑し

い老爺だ」話をしてゐる處へ二十五六の青年と三四人の幼童がゾロ

／＼歸つて來た「老爺さん今歸つたよ」「コレ／＼孫や御客が二人晝

食をしたいと云つて待つてゐなさる、早く拵へてあげな」「然うかい

それは有難う、お客さん御出なさいまし御待たせ申しました」禪師

是れを見て「うむ若い者だけ却々世辭が能いな、どうか何でも能い

から二人前早く拵へて呉れ」「畏りました」左右する内飯も炊け芋汁

が出来た、禪師は新左衛門と共に快く晝食を喫め、この老爺の話を

仕てゐると、孫は禪師の傍へ來て「エ、御出家様、お前さんは一休

様かね」禪師は新左と顔を見合はしてゐると孫は段々傍へ寄り「な

あ御出家今俺は床屋で關の地藏様の話を聞いたが一休様は豪い方だ

といふ大層な評判だ、御前様どうも然うらしい何か書いて下せえな

「かゝ、貧道は然う云ふ者ではないが頼むなら何か書いて遣らう

「さうかねダガ一休様でねえと満まらねえ」老爺はパクリ／＼煙草を喫んでゐたが「孫や乃公が書いて遣らう」禪師笑ひ乍ら「老爺汝にも書いて遣らうかな」御出家汝さんにも書いて遣らうかな「あゝいふ老爺だ、新左面白いな」左様でございます」其内筆墨の用意が能る、禪師紙を展べて家内安全と書くと老爺さん手を拍つて欣んだ。「御出家汝さんは豪い、何事も家内安全が基だ、スツカリ感心した、俺も書いて遣らう」無理に孫に紙に筆墨を出させて小便無用と書いた、手が顫へて拙い字だが當人平氣で「サア御出家是れを持つて往きなさい、往來で馬に糞でも引つ掛けられると悪いから脊中へ貼つ

て歩きなさい「老爺さんお止しよ」孫は切りに氣を揉んでゐる。禪師は喜んでそれを受取り「サア新左これを其方に遣はす大切に致せ」御申戯仰有つては可けません「まア然う云はずに取つて置け」老爺此態を見て「乃公の書いた物を二人共欲しがつてゐる」

一三三 一國一城の主も大閉口

濱松の宿へ今何様かの御通りがある「下に居ろ／＼」却々大した勢ひだ、恰度其處へ新左衛門を連れて差蒐つた禪師が偶と見ると、下座觸れの主は駕籠に乗り、供方も大勢隨いてゐます。スルト、禪

師何思ひけん脱いだ笠を復被りはじめた。侍がそれへ来て「コレコレ旅僧笠を被つてはならん被り物はならんよ」「いゝよ關はつしやるな」「おや此奴ならんといふのに分らんか」「分らんでも好い、一向差支がない」「平氣で笠を被つた、侍は眼を剝いて「此奴無禮者め、下に居ろと申しても下座を致さず、被り物はならんといふに笠を被る、最早宥す事は相成らん」取つて押へやうとした時、駕籠の中に聲あつて「コレ／＼粗忽いたすな」と制め、若侍を招んで何か囁いたが、若侍は直ぐそれへ來た「エ、少々伺ひますが貴僧は豫て東海道御遊覽と承はる一休禪師様では在しませぬか」「分つたかい一休ぢや」

途端に駕籠の引戸を開けて大守らしい人が飛出した「ハツ、是れは禪師で居らせられるか、某は二階堂信濃守則重と申すもの、御通行とも存せず下座觸れ御耳觸りの段平に御容赦を願たい」大地に手を突いてゐる「然うかい、貧道は耄碌して物忘れするが汝はたしか國府の國守だつたね」「左様でございます、今度上洛致します」「然う分れば宜しい、早く往かつしやい」「有難うございます、禪師今晚は何れへお泊りでございませうや」「泊りかい、定つてゐない、身は雲水の僧ぢや草臥れ、ば野宿もする、さあ／＼貧道に關はず往かつしやい」「然らば御免被ります、禪師にも御機嫌克う」「ハイ有難う

「御免」駕籠へ入つて下に〜と往つて終ひました、禪師御覽になり「新左衛門これだから困るノ、多寡が國守位で下座觸れ制止をして旅人の往來を暫時なりとも止めるとは何事だ、ア、困つたものだ然うも威張りたいかノ、貧道が一つ困らして遣らう」のこ〜お出なさる、新左衛門後から隨いて行くと、濱松の本陣には定紋附いた幕を張り、青竹の菱垣を設へ、檜の木柱目の板へ二階堂信濃守様御宿と書いた立札があります。禪師笠を被つた儘衝と御入りになつた。本陣の亭主それへ出て切りに譯を云つて斷つたが肯かない「貧道は今夜是非汝の許へ泊るよ」それは可けません「關はないよ」此

方が關ひます「アハ、二階堂信濃に左様いつてお呉れ貧道は一緒に泊るからつて、草鞋の儘ズン〜昇つて往く、新左衛門も面白半分草鞋の儘で昇つて往くと本陣の亭主は益々驚きごつた返してゐる。此物音を聞いて出て來た二階堂の家來がヒヨイと見ると禪師と新左衛門だ、イヤ驚いて亭主を制し「コレ〜亭主兎相があつては相成らんぞ、此御仁は京都紫野大徳寺の一休禪師様で、御隨伴は永らく寺社奉行をお勤めになつた蜷川新左衛門様であるぞ」本陣の亭主腰を抜かした。信濃守も聞附けてお出迎ひをする「まづお昇り下されますやう、御同宿は恐れ入ります故手前宿替致しまする」ナニそれに

は及ばん、併し信濃、まだ其方の身分では往來で下座觸れをしたり宿へ立札をして旅人を困らせるのは早からう、以後は氣を附けなさい、貧道は時に依れば木賃宿へも泊り堂宮へ泊る事もある。今後は大仰な事は廢しなさいよ」信濃守恐れ入つた。其夜は廣い座敷に禪師は信濃守と對向で種々のお話があり、信濃守は徹宵臥かされ莫つた。翌日は這々の體で供方を減じ、僅か三四人で濱松を出立し「今日から下座觸れは廢めちや」

二四 身延山で南無阿彌陀佛

一 休禪師甲州身延山參詣を思ひ立たれました。新左衛門も大きに喜び、途中充分に氣を附けて登山の途に就きました。七面山奥山の難所を越え、今身延の石磴を昇り乍ら、禪師は切りに「南無阿彌陀佛を々々々々」と念佛を唱へる。參詣の人は驚いた「何ですへあの坊さんは「少し狂れてるやうですね」種々に噂するが一向頓着なく、本堂へ来て一心に念佛を唱へてゐる、一人の僧がそれへ来て「モシ、御出家當山で念佛をお唱へになつては困ります「悪いかへ「へえ悪いと申す事もございませんが、當山は法華の靈場でございますから「成程」とうぞ念佛を仰有やらんやうに「何人か嫌ふか

へ「嫌ふといふ譯でもございませんが其處をどうぞ」「あゝ然うか貧道が悪かつた、併し貧道は法華ではないのだからな、無理に南無妙法蓮華經と心にもない題目を唱へては佛に濟まん、是れを方丈へ届けてお呉れ」筆と紙を出してサラ／＼と南無阿彌陀佛と認め、宗純と書いて渡されたの、可笑しな坊主だと思ひながら取次が是れを本坊へ持つて往くと、方丈は見て驚き「是れは禪師に違ひない」と慌てゝ出て來ると、禪師は本堂の椽側に腰を掛けてゐる「是れはく禪師さま」「ア、お前が方丈かへ南無阿彌陀佛く」「禪師當山でそれだけ御免を願ひます」「あゝ今も叱られたよ」「どうぞ本坊へ御光來を

願ますお茶を献じ今晚のお宿を致したう存じます「有難う、併しそれは斷るよ、今門前で見て來た宿屋があるからそれへ泊る」宿を仕やうと云ふのを達て斷つて坂を降り、左り手毀れた宿屋へヌツと入つた「ハイ御免よ」「御出なさいまし」「二人だよ」「有難うございませ」案内されて見ると汚い家で廣い座敷に先へモウ三人連れの客が泊つてゐる「ハイ御免よ」「おや御出家さん御疲れでせう」「お前方も御疲れだらう、何かへ身延へ參詣かへ」「ナニ子御出家、俺は江戸の者で一向宗だがこの二人が法華だもんだから誘はれて見物に來たんです」「あゝ見物かい、ぢやアお前は妙法ではない陀佛だね」「エ、陀佛で

す「然うかいそれは有難い貧道も陀佛だよ」此話を聞いた宿の亭主は眞赤になつて愠つた「さアノ、今聞ひてありや参詣に來たのは二人で餘は見物ださうだ法華は泊めるが餘は斷りますよ出て往つて下さい」「オイノ、御亭主、今になつてそりや困らアな、第一お題目ばかり有難くて、お念佛は何故有難くない」「さうさ念佛無間禪天魔だ法然だつて親鸞だつてありや生臭坊主だ」「オヤこん畜生生臭坊主とは何だ、修業が積んで悟を開いてお出なさるか、心の中は清淨潔白な有難い方だ」「ヘン何が清淨だ、親鸞だつて法然だつて子があるぢやないか」「子がありや怎麼したい、魚肉を食や怎麼したい、日蓮宗

は一番後から弘めた宗旨で、日蓮なんぞは房州小湊から泳いで來たダダブダブノ坊主だ」「ダブノ坊主とは何だ、さア出て往つてお呉れ法華宗の他は泊める事は出来ない」「大變な騒ぎになりました。双方共茄章魚の如になつて今にも殴合ひ兼ねまじき様子に、先刻から新左衛門と共にクスノ笑ひ乍ら様子を見てゐた禪師は耐り兼ねました「まアノ、双方共待ちなさい、御亭主お前も宿屋稼業を仕てゐながら那樣事を云つてた日には稼業が能まい、此三人は連れだ一人離れる譯にも往かないのだ、まアノ、貧道から謝る勘辨してお呉れ、何方が負けても詰まる處はお釋迦様が御迷惑だ、な 分つたか、是

れからは決して旨論を仕なさるな、人にはそれごとく信仰といふものがあるのだ、宜いか、さあ是れで勘辨しなさい。

南無を避け四字と五字とが九字となり

一字の事で住持迷惑

どうぢやな」亭主頭郎を掻き「有難い分りました、さア客人仲直り
しませう」

二五 牛に曳れて善光寺詣り

一休禪師信州善光寺參詣を思ひ立ちました。お伴は相渝らず新左

衛門で、面白い旅を續けます、身延から高遠で、高遠から諏訪へ出て信濃路へかゝる「御休みなすつて往かつしやい、名物の芋田樂がありますだよ」「新左衛門此茶屋へ休まう」「宜しうございませう」「ハイ御免よ」「御出なせえまし」茶屋の爺さんはホク／＼してゐる禪師田樂を食べたが餘まり旨くない「コレ／＼老爺田樂は名物かも知れぬが不味いな」老爺些し變な顔を仕ながら「御出家さまそりや可かねえ、物は旨いと思へば旨いし當初から不味いだらうと思ふと旨くない、氣と心と別れ／＼になるから旨くないだ」「さうかえ、併し善光寺には參詣があるかへ」「あるの無いのといふ段ぢやありましねえ、

毎ごとでもえらい人ひとだよ、亡もうじや者ままで来きますだからねえ「然さうか何どうして
 分わかる「そりや分わかりますだよ、亡もうじや者に限かぎつて何なにを食たべても錢ぜに拂さらつた事こと
 がなく、必きつと然ぜん腕わんを伏ふせて逃にげて往いくだからね「ふむ然さうかえ、そり
 や珍めづらしい事ことを聞きいた、時ときに老ぢい爺や、よく牛うしに曳ひかれて善ぜん光くわう寺じ詣まり
 いふ事ことを云いふが、あれは全ぜん體たい何どう云いう譯わけだ「御ご出しゆつ家けさん知しらねえか
 ね「うむ知しらない「ぢやア話はなすべえ、この信しん州しゆう上じやう田だの在ざいに慾よく張はり婆ばあ
 あがあつて一あ日ひ布ぬのを晒さらしてゐると、何ど處どこからか牛うしが走はしつて来きて布ぬの
 角つへ引ひつ掛かけて逃にげました、婆ばあの大おほきに慍いつて牛うしを追おひ掛かけたが
 何どうしても追おひつません、其その内うち口くちが暮くれて終しまひ、婆ばあが善ぜん光くわう寺じまで追おひ

掛かけて往いつた時じ分ぶんには牛うしの姿すがたが消きえて如に來らい様さまのお姿すがたが現あらはれ、牛うしの
 流ながした涎よだれが歴あり々くと文ぶん字じになつてゐたといふ事ことです「ハ、アそれから
 何どうした「その時ときに婆ばああが讀よんで見みると

うしと見みし思おもひな詫わびた菩は提だい帳ちやう

道みちにはいるは我わか心こころから

とあり、傍そばには如に來らい様さまがゐて懇こん々と御お諭ぎ下くだれたので婆ばああ倏たち忽まち
 菩は提だい心しんを起おし、それより六じ字じの唱しやう名みやうを稱となへて我わ家がやへ歸かへり、それから
 一しん心しんになつて信しん心しんをしたので大だい往わう生じやうを遂とげ、今いまでもその時ときの牛うしが布ぬの
 引ひ觀くわん音おんとなつて上うへ田だの在ざいに遺のこつてゐますだよ、「ホ、ウ然さうかい、

それは有難い事ぢやな「有難い處ではない、善光寺の如來様は守屋の大臣といふ悪人が、三日三晩火の中へ入れて溶かしたが溶けなかつたので難波の池へ投げ込まれ、本多の義光といふ人が池を通りかゝつた時に義光々々と呼んで水から上げさせた位のものだから、世の中にこの位有難い如來様は無えだよ」「老爺却々詳しいな、如來様はそれでも好いが、一體何か今の上田の婆あが住んだ處から善光寺町まで里程はどの位ある」「十一里ありますだよ」「其道に川はないのか」「大きな川が二つあります」「その川を何うして牛が越したえ」「へえ」「イヤサ何うして牛と婆あが渡つたえ」「そりやお前え様觀

音様になる位の牛だから那樣川越す位の造作はありましねえ」「然うか、ぢやア牛はそれで負けて置かうが婆アさんは何うした」「牛の脊に乗つて渡つたでさ」「ふむ然うか、婆アさん牛の脊に乗つて越したか、えらいな、ダガ老爺さんその婆アさんは牛の脊に乗つてゐながら、角に搦んでゐる布がどうして取れなかつたね」「それがその如來様の手引でさ」「コレ老爺さん暢氣なものだな、そりや皆んな拵へ事だ」「こりやおへねえ、御出家さん眞個だよ、上田の在で布引の觀音といふと評判の觀音さまでがさ」「こりや熱が強いなまア」「往かう、老爺御世話になつたな」「コレ御出家さん三百六十四文お貰ひ申

すだ「無い、二人共亡者だ、其處にチャンと椀に伏せてある」

二六 鬼の濟度は出家の役目

禪師は新左衛門と共に、信州牟禮の街道を暢氣に馬を打たせて居ります。馬士は大きな聲で「コレ御出家さんは是から先に關川の御關所があるが手形はあるかね」「うむ持合はしてゐない、關所は嚴ましか「嚴ましいだよ、けんど關所手前に茶屋があるだから其處で三百出すとその手形を書いて呉れるだ、二人で一本書いて貰つたら可かんべえ」「然うかそりや親切に有難う」間もなく茶屋へ來る、禪師

は新左衛門に命け幾らか酒代を遣つたので馬士は喜んで去りました。「コレ老爺さん」「ハイ」「關所役人は甚く嚴ましか」「御話になんねえ、今の役人は板倉九十郎様といつて異名を鬼といひますだ」「手形が無けりや三百で書いて上げますべえ」「うむ關所役人は鬼か」「然うだよ」「それなら手形は要らん」「ハテね」「デモ出家は鬼を濟度するが役目だ、一つ鬼に談判して遣らう」「そんな事云ふもので無えだ」「何構はん、茶代を此處へ置くぞ」「モウ往かつしやるか、大丈夫かえ」「うむ大丈夫だ」關所へ蒐ると番卒が却々通さない、其處へ九十郎が出て來た「コレ、何を争つてゐる、其方共は手形を持合はさぬか」「ハ

・アお前が鬼かへ「ナニ」我々は諸國を修行し靈山靈地を詣で國々古跡を見物に參るものだ「何でも構はん、手形があれば通してやる」「當然ちや手形があつて通されなくて耐るものか、處がそれが無いのだ「無ければ通す事罷りならん」「さうかい、併し向ふへ往つても可からう」「コレ」何を申す、關所は手形がなければ通れぬは當然だ、うつけ者め「ハ、アうつけ者かい窮つたな」「一體其方等は何處から何處へ通る」「彼方から向ふへ通る」「ナニ」「彼方から向ふへ通るよ」「こいつが」無禮者奴、手形が無ければ元へ歸れ「然うかへ」「そんなら此處で書かう」「コレ」坊主、其方が此處で書いた手形

143 一 休 和 尙

が役に立つか、關所の法として出家にはその宗旨の本山から許され、寺社奉行の奥印の据つた手形が無ければ通す事はならん「ア、然うかへ些しお待ち、新左衛門や、手形には本山の許しがなくとも寺社奉行の奥印があればそれでも宜ろう」「それで宜しうございます何なら此處で手前が書きませうか」「些し待ちなさい、コレ鬼「何だ鬼とは」「さう慍んなさんな、デハ九十郎や、「益々怪しからん」「アハ、あのな手形に寺社奉行の奥印が要るといふなら此男が書くさうだ」「此奴愈々狂人だ、コレ寺社奉行の奥印代りに其者が手形を書いて判を捺しても何になる、愚の事を云ふものではない」「デモ此處へ來

る所存もなく来たので、寺社奉行の奥印を貰つて呉る暇が莫つたのだ、その代り判の代りに人間を連れて来たから一層確實な筈ぢや、此男の奥印で通してお呉れ「イヤ成らん、愚圖／＼云ふと容赦しないぞ」此時新左衛門ツカ／＼進んだ「御當番板倉九十郎といふは貴公か「此奴も却々の逆せ方だ、二人共狂人ぢや手も附けられない」何を申される、貴公が九十郎なら九十郎とハツキリ云はつしやい「何だか狐に魅れたやうだ、さうだ狂人、拙者が九十郎だ「貴殿は鬼といふ異名がある相だが耽と左様か「愈々以て怪しからん奴ぢや、那樣事は知らん哩「左様か、知らんけりやそれで宜しい、コレ九十

郎是れにお出になるのは勿體なくも一天萬乗の君より格別の御扱ひを受け給ふ京都紫野大徳寺事新樹庵の一体禪師様で、拙者は隠居こそして居るが永らく寺社奉行を勤めた蜷川新左衛門でござるぞ「エツ」九十郎吃驚した途端に椽側から下へゴロ／＼／＼。

二七 病氣には黄金湯が妙薬

北陸道第一の難所に親不知子不知といふ處があります。一方は切立つたやうな屏風岩、一方は見渡す限りの青海原で、寄せては返す、旅人の脚下を掠めて山の腰を洗ひ、折々は山なす怒濤街道に掩ひか

つて狂奔する恐しさは、夏より秋へかけて殊に甚だしく、土地の者も干潮時を待つて往來する程です。恰度九月上浣、一休禪師は善光寺參詣を終へて新左衛門と共に此難所へ差蒐りました。ザブくドブンと岸を洗ふ高浪の引いた處で、その干形を禪師は駈けて通らうとする、新左衛門は萬一の危険を氣遣つて切りに止めました「禪師様是れは御見合はせが宜しうございませう、萬一の事でもありませんしては手前が窮ります、どうぞ後へお戻り遊ばして浪の静かになるまで兩三日御滞在を願はしう存じます」新左衛門は「んよ、氣を注げて往けば大丈夫だ、何も話の種だから往かう」「デモ浪が参りますと

「心配しなされるな」何うしても肯入ない。新左衛門は據るなく禪師を扶けて辛く親不知を通り越し、今や子不知の難所へ差蒐ると、五六間先に一人の少女が浪に攫はれ「アレー」と云つて悲鳴を揚げ沖の方へ引込まれやうとしてゐる「新左衛門は、其處へ駈來つりました」齡は老つても腕に覺えのある新左衛門は、素敏く少女の袂を捉へ、力に委せて引戻したので少女は危き命を助かりました、禪師も急いでお出になる「お、新左衛門助けたか」「ハイ辛く救ひました」少女は嬉し泣に泣いて欣ぶ。此少女は一里距つた澁里村の者です。段々事情を訊いて見ると父は藪醫者で碌々病家も

なく、母は大病で今日か明日かといふ情なさに観音様へ参詣しての
 歸りだといふ。さあ禪師は捨て、置けない、少女に案内させて往つ
 て見ると成程貧家だ。親父は年齢五十四五の一癖ありさうな人物で
 衣類も餘程麓末「お、娘戻つたか」「ハイ今戻りました」「あのお父さ
 ん此旦那様に慙う云ふ譯で命を救つて頂きました」と一伍一什を述
 べる、親父は欣んで禮を云ふ。禪師は何處へ往つても遠慮のない人
 「コレ、娘御の御親父お茶を一抔所望したいな」「只今ぢき湯が沸
 ります」「ア、左様かそりや有難う、その代り御病人の薬を貧道から
 進せる」「あの手前の妻に薬を」「お、然うだ待たつしやい」禪師は胴

巻から豫て用意の金子を出して「病氣には黄金湯が一番利くから」
 と云つて與へました。少女も病人も欣び、親父も幾度か禮を云つて
 受納め、何か奥でゴト／＼してゐたが阿部川を拵へ茶と共にそれへ
 出しました。禪師欣んで箸を採らうとする時、病人は突如寢蓐から
 這ひ出し「御毒味を致します」といつてその阿部川をムシヤ／＼食
 つて終ひ、少女は二杯の茶を飲乾して終ひました。皆々是れはと驚
 く内に母子は血を咯いて苦しみ出したので。新左衛門偕はと肯いて
 親父を取つて押へやうとすると飛退つて庖丁で斬つてかゝるのを、
 苦もなく引つ外して押へ附け、有合はした細紐でグルグル巻にし

した漸次調べて見ると此奴恁う云ふ事をして旅人の金を盗んでゐる事が判つた。母子は涙乍らに苦しき息の下から「平常が平常故御出家の胴巻を見て悪い量見を起しましたのでございませが私共母子は貴所方に代り命を捨てます故、どうぞ私共には親父なり夫なりの此東庵の命は御助け下さいまし」と手を合はせる「禪師どうぞ致しませう」「新左、助けて遣れ、是れ東庵因果應報は眼前りぢや、必ず悪事を仕てはならんぞ、貧道は京都紫野大徳寺の一体ぢや、金が欲しくば持合はせを半額遣る、その代り心を改めて善人になれ」東庵今更の如に前非を後悔して剃髪し母子の菩提を吊ふ事となる。

二八

人間は本來空の無一物

禪師は漸く越前福井へ入りました、同所には永平寺といふ曹洞宗の大寺もあるが洒落飄逸の禪師は故と訪ねず、城下の旅宿へ泊りました。スルト新左衛門の顔色が甚だ勝れない「新左衛門如何致した」「ハイ、先日あたりから何うも胸へ差込が参りまして甚だ難澁を致します、併しお伴の手前が貴方に恁様な事を申上げましては相濟まんと心得、實は今まで耐えに耐えて居りました「左様か、イヤ病は押しては可かん、それにしても道中では思ふやうに手當も能まいか

ら今の内貧道に關はず京都へ歸つては何うだ「併し是れまでお伴して参りましたのに、手前一人京都へ立戻りますのも何うやら申譯はございませぬ「イヤそれは無用だよ、貧道も同伴に戻りたいが二度とはモウ來られんし殊に見残した處もあるから貧道に關まはず歸んなさい「左様なら思召に従ひ一足お先へ京都へ立歸り薬用手當を致して禪師の御歸洛を御待申ます「アハ、新左御門然う云つても壽命許りは何うする事も出来ないよ、貧道が歸るまでお前が生きてゐて來れ、ば好いが、モウ遇へないかも分るまい、ダガ今度對面するまでは何うかして死な、いやうにしてお呉れ、石にかぶりついても待

つて居つてお呉れ「唯、手前も死なん積りではございませぬが、無常の風は時を嫌はんとか申しますから、何うなりまするやら分りません「然う、然う、那麼事もあつたつけな、併し十日や十五日待つても差支莫らう「禪師も洒落て居れば新左衛門も暢氣なものです、禪學を學んで其奥に入れば這麼ものかも知れませぬ「では禪師、明朝發足して京洛へ立歸ります、御縁があれば生前御眼にかゝりますが、次第に依ると是れが御別れになるかも知れませぬ、随分御機嫌よろしく「あ、然うか、新左めでたいな「へえ愛たうございませぬか「愛たいではないか、今お前は是れが別れになるかも知れんと云つたが、

縦令一旦は別れた處でいつか一度は冥土で對面をするのぢや本來空
 無一物とは此處ぢや、併しな新左、貧道も直き歸るから何うかそれ
 までは死なゝいやうにして呉れ、お前の死ぬ時には貧道が引導を渡
 したいから、若しそれ迄に冥土から迎ひが來たら一と月許り待てと
 云つて日延して置きなさい「手前もなりたけ日延して置きます」「あ
 ゝ然うしなさい」通し駕籠の用意をして其晩は臥たが、翌朝何とな
 く双方名残が惜しい「新左、何うも顔色が好くないな、充分氣を注
 けて往かつしやい」「有難うぞんじます」「あゝ待て新左、是れはお前
 も知つてゐる通り貧道が秘藏にしてゐる珠數だ、是れを進げるから

持つて往きなさい、謂はゞ一休が同伴に往くやうなものだ「有難う
 存じます、新左是れを頂きますれば七珍萬寶を頂きましたるより嬉
 しう存じます、思召に従ひ欣んで頂戴いたします」押戴いて駕籠に
 乗る様子を、禪師は凝乎と見てゐたが「あゝ是れ新左、少し待たつ
 しやい」「ハイ何御用でございます」「うむコリヤ新左、人間の定命に
 は限あるぞよ、今貧道が同伴に歸らんのを不實と思ふか知らんが助
 かるものなら一人でも助かり、死ぬものなら貧道が居つても死ぬ、
 冥土から使ひがまゐつても必ず断れよ」「有難うございます仰せは固
 く守ります」「左様か氣を注けて往きなさい」駕籠の上る途端に禪師

何を云ふかと思ふと「新左、お前は助からないよ」

二九 貧道が恐いか此弱虫奴

越前の府中といふ町に大きな道場を構へ、多くの門弟を取立て、盛んに剣術の指南をする蟻田隼人といふ武藝者がありました。一休禪師がその門前へ差蒐つたのが彼是午頃、道場には木太刀を打合ふ音が勇ましく聞えてゐます「お、大分勇ましいな」禪師は少時門内を見てゐたが、何思ひけむ、ノソノソと入つて玄關へ蒐りました。「頼むよ、コレ誰れも居ないか頼むよ」訪れると若い門人が出て來

ました「お、是れは旅の御坊何方から御出でなされた」彼方から來た、併し腹が減つて仕方がない、何うか一飯頂戴致したい「折角だが此處は武藝の道場でござる、飯屋へ往かつしやい」左様な、併し貧道も此處が飯屋でない位は知つて居る、併し飯屋が何處にあるかそれは知らない、何うせお前の處は人も大分居る様子だから食物も澤山あるだらう、愚圖々々云はずと食はせなさい」門人は驚いて奥へ飛込んだ「先生先生狂人坊主が參りました」「ナニ狂人坊主が」「左様でございます、何だか汚い服装を仕て飯を食はせろと云つて肯きません、如何致しませう」「通り掛りの旅僧か」「左様でござる

「あゝ左様か、然らば臺所へ通して何なりと齋を參らせるが宜い、出家にはそれがまた修行の一つでござらう「承知致しました」門人は復び玄關へ出て来て「御出家此方へ通らつしやい、先生の御許しを得て齋を參らせる「イヤそれは有難い。併し貧道は不味い物は嫌ひだから豫め斷つて置く「贅澤を云はつしやるな」臺所へ連れて往かれた時に禪師は其處へ坐るかと思ふと坐らない、ツカ／＼と奥へ往つて隼人の褥の上にチャンと畏まつて終つた、弟子は復驚いて隼人に告げる、隼人稽古を中止して来て見ると此状態だ「あゝコレ御出家然う勝手な事をしては可かん「何だお前は「拙者は當道

場の主蟻田隼人だ「ア、然うか成程隼人らしい顔をしてゐる「ウム狂人だな、コリヤ旅僧、拙者は早く兩親を失ひ佛道を信じてゐるから旅僧には相當の扱ひを爲る所存だが、那樣勝手な振舞をしなさんと捨てゝは置かんぞ「フムそれでは何う爲なさる貧道は僧侶だが禪宗ぢや、修行の傍ら武道も嗜んでゐる、殊に諸國を遍歴致す者幸ひ一本教へて遣はさうか」隼人も道がに些し憤然としたが、門弟連が承知しない、何うしても禪師を打据ゑやうといふ、隼人大人氣ないと思つたが、兎も角も禪師との立合ひを許すと門弟連は欣んだ「サア道場へ往かつしやい「イヤ此處で澤山だ、恁うしてゐるから何處

からでも打たつしやい」氣早の門弟は喝と怒つて木太刀を押つ取り
 「汝れ」と云ひさま今打込まうとすると、禪師は兩眼を閉ぢて坐睡
 りをしてゐる。さあ打込む事が出来ない「コレ旅僧々々」と云つて搖
 起すと、禪師潤と兩眼を睜き「何故打込んで來ない、それ共貧道が
 恐しいか弱蟲奴」門弟眞赤になつて曳と一聲打込まうとすると、禪
 師又坐睡りを仕てゐるので打込む事が出来ない、此様子を見てゐる隼
 人が「御出家々々々」と搖起すと禪師眼を開き「何うだ打込めまい、
 これが禪家悟道の妙術ぢや、アハ、、、」「イヤ御出家少々御尋ねす
 るが貴僧は京都紫野大徳寺の一休禪師ではござらんか」「は、あ分つ

たかえ「分りました、門弟が木太刀を取つて打込まうと仕た時貴僧
 は空寢ではなく眞個に御臥みなすつた、是れは禪師にあらざれば能
 ません恐れ入りました、禪師が此の越前へ御來遊の事は兼々承はり居
 りました處宜うこそ御光來、是非當分御逗留を願はしう存じます、
 「イヤそりや困つたね一休と分つては満らないもんだ、また來やう
 左様なら」

三〇 化物には是非遇ひたい

禪師そろ／＼京洛へ歸る氣になり、敦賀から海津の手前まで來る

と不圖道に迷ひ行けども、人家がありません、スルト向ふにチラ
 ー燈火が見える、近づいて見ると百姓家です「あ、少し頼むよ、
 まだ寝はしまい、一寸聞きたい事がある」聲をかけると爺さんが窓
 から顔を出した「御出家さん何だえ」「貧道は京洛へ歸るものだが不
 圖して道に迷ひ飛んだ處へ來てえらく辛臥れた、第一腹が減つて難
 澁するが近い處に宿屋はないか」「那樣者はありませんねえ」「フムそれ
 では庄官は何處だえ」「庄官とは何の事ツた」「名主の事だ」「あ、名主
 様かえ、そりや半里許り離れてゐる」「ナニ半里それは窮つたな、何
 うちや物は相談だが今晚お前の處へ泊めて呉れぬか」「氣の毒だが御

断りだ「可けないか」「あ、可けねえよ」「ふむ一體そりや何う云ふ譯
 だ」「何う云ふ譯ツてね御出家、日外お前エのやうな坊さまが此村へ
 來て泊めて呉れツて頼んだよ、難澁して氣の毒だと思つて泊める
 とねお前エ、それが夜半にえらい盜賊と變つた」「成程」「それで名
 主様から御觸れが出て坊さんを泊める事はなんねえだよ」「それは大
 きに不都合だ、貧道は那樣者ではねえだよ」「可けねえ、何と云つて
 も駄目だ、誰れもはア乃公は盜賊だと名乗る者は無えだからな、お
 前エだつて坊さんなら満更盜賊に縁の無い事もなかんべえ」「流石の
 禪師も是れには些し驚いた」「好しく、それでは泊めて呉れとは云は

ぬが、何處か此近所に寺はないか「寺かね、寺ならタツタ一軒あり
ますだ、是れから西へ往くと西藏寺といつて、今は住持も何も居ね
え破れ寺でがさあ其處へ往かつしやるかね「うむ宜からう、何か變
つた事でもあるか「化物が出る「ナニ化物そりや面白いな、什麼な
具合だ「俺も見た事はないが何でも夜中になると本堂へ出て踊りを
踊るさうだ最初はえらい騒ぎだつたが今は誰れも往つて見る者はあ
りましねえ「それは有難い「ナニ有難いね「さうだ這麼有難い事は
ない、貧道は此通り諸國を遍歴して修行する旅僧だが、まだ化物を
見た事がない、是りや儘に修行になるだらうと思ふと寔に有難い事

だ、それでは今晚西藏寺へ往つてその化物にお目にかゝらう「何う
でも勝手にさつしやい、コリや氣違ひだ「まア何でも好い、道程は
何の位ある「譯はねえ、是れから西へ二三町往くと毀れかゝつた
大門があつて、それを入ると本堂で直き分るよ「大きに辱けない」
禪師は其處を出て教えられた通り二三丁來ると成程毀れかゝつた大
門があつて倒れさうになつてゐて門内は草蓬々と生ひ茂り、本堂は
建具は皆な無くなつて四方掛拂ひ、正面には佛像も無ければ花もな
い、床もモウ餘程朽ちて大分危い處があります「はゝア是りやひご
い破れ寺だな、禪師は靜かに四邊を胸はすと、本堂の横手に亂塔場

があつて、石塔は大抵倒れてゐる。「成程化物が出さうな處だが那樣者が此世にあつて耐るものかと嗤ひながら、本堂正面へどつかと座つて見たが、掛拂ひの堂内は寒くて耐らない、禪師はなりたけ風にあたらぬ處を選つて胡坐を掻き、早く化物が出れば好いにと切り待つてゐたが却々出ない、四邊は只森として後方の竹藪に風の戦ぐ音が聞える許りで、夜は漸次更け渡つて來ると、禪師は道がに睡氣を催しました。乃で辛く古蓆を見附け、それに風呂敷を布いてゴロリと横になりました。

三 閻魔様へ手紙を届ける

彼是れ子刻と覺しくなりました。禪師は我知らずトロ／＼とする、俄かにドン／＼と足拍子が本堂の後方から聞えて來た。禪師偶と眼を覺ますと、年頃十七八と覺しき美しい少女が三人、孰れも友染の振袖を着て、手に／＼塗柄の京團扇を持つて庫裡で切りに踊つてゐる、禪師それを凝と視て耳を澄ませると、口々に涼しい聲で歌を謡つてゐます、

東は野邊の春景色、樂しき中に悲しきは、先祖の骨を積上げて、

何れも野邊の草の露、哀れと云ふも餘りあり、人は何時かは死ぬものを、悟れど今は涙なり、始終は野邊の土の中、草の雫となり
にけりく、

南は池の水に住む、魚も此頃時を得て、その大海を眺むれば、今まで動く尾も鱗も、水に堰れて動かれず、池の蛙は情けなやく、北は何れも山續き、森の木蔭に住居する、狐は不便なるものぞ、官も昇らず年老いて、夜なく己が火を燃やす火を燃やす、禪師是れを見ると如何にも面白い、が是れは疑もなく狐狸の仕業なるべし、好し／＼貧道が彼等を濟度し呉れんと其場に立上り「汝

等姿を女に化て人を惑はし、恚く寺院を大破いたす、其罪固より宥すべくもなし、今より必ず此御堂に出で、踊などいたす事は相成らん」と大聲で叱りつけ、矢立の筆で延紙へ「南無釋迦如來」と書き附けると、不思議や三人の少女は搔消す如くに倏忽ち其場を立去つた、其途端禪師はバツと夢から醒める「ハ、ア今のは夢であつたか古寺には恚様事はよくあるものだ」と其儘復たグツスリ臥込むと、其内に夜が明ける、其處へ此事を聞附けた村の者が昨夜の爺さんを先に立て、十二三人やつて來た「何うだらう爺さん、その坊さんは化物に喰はれて終つたらうか」「乃公の制めるのを肯かずに此廢寺へ

来たのだもの、大方喰はれてゐるだらうよ」口々に噂を仕て入つて見ると、其處には禪師が好い心地に臥てゐたが、此物音で眼を覺ました「イヤ皆んな来たかな」お、御出家さん變つた事は無いね「大丈夫かい」お、お前は昨夜貧道に此寺を教えて呉れた爺さんだね、お前のお庇で夜半に面白いものを見たよ「然うかえ、何しろまあ無事なのは愛たい、一體何麼なものを見なすつたね」なゝに化物さ、「えッ化物」アハ、吃驚しなさんな狐狸だ、狐狸が女に化けて踊を踊つたのを見たよ「へえ」乃でな皆の衆此南無釋迦如來と書いた紙を本堂の正面へ貼つて置きなさい、モウ化物など出る事はない、

見れば當山は却々の大寺だが、永く無住にするから這麼事になる、貧道は其内一人の出家を送つて此寺を守らせやう「大きな事を云ひなさるな、一體御前は何處の人だね」京都紫野大徳寺住職の一体といふ者だ「一同の者は驚いた」ヒヤアお前様が一体様かえ」といつて直ぐ此事を名主の許へ知らせる、名主も驚いて其の場へ飛んで來る「兎も角も朝のお齋を參らせたい」と禪師を自宅へ請じ、茲でこの廢寺の住職を京都から遣して貰ふ事に約束してゐる處へ、一人の老婆が杖に絶つてトボくと訪ねて來たので、禪師何用かと訊くとこの老婆は齡七十を越えて子や孫に死別れ、此先死んでも迎も極樂

へ行けさうもない、何うか禪師のお徳に依つて地獄の鬼や閻魔に責められぬやう、何か書附を頂きたいと云ふに、禪師笑ひ乍ら、造り置く罪は死ぬ程あるなれば

閻魔の帳へ附け處なし

閻魔大王へ

一 休

と書いて「さあ婆さん、死ぬ時には此手紙をしつかり掴んでゐなさい、閻魔に責められる氣違ひはない」といふと婆さん欣んだが、その紙を掴んだまゝ、バツタリ頓死をして終ひました。

三三 彌陀の浄土へ案内致す

病氣に罹つて途中禪師に分れ、通し駕籠で京都鷹の峰の邸へ立歸つた蜷川新左衛門は却々の重體、療治も手後れになつたので醫者も匙を投げ、今はモウ湯水も咽喉を通らず、木の枯れるやうに漸次呼吸も細り、何時鬼籍に入るとも計り難いが、まだ心は確かですトと眠込んでゐる、枕頭を護る家人や親類縁者は涙ながらに低聲で稱名を唱へてゐると、倏忽ち新左衛門の耳を貫いて笙筆律羯鼓などの調べが聞へるので、ハツとなつて眼を開くと、其處には一條の

紫雲棚引いて、三尊の彌陀二十五の菩薩が赫々と光明を放ち「如何に新左衛門、汝是れまで佛學を修め、一休禪師の供となつて諸國を修行したる段神妙なり、依つて今彌陀の淨土へ案内致す左様心得べし」といふ彌陀如來の聲が聞えた、スルト新左衛門何思ひけん「我れ禪師の教に依つて能く佛學の悟道を知れり、然るに徒らに命を惜しむ凡夫と誤り、我れを彌陀の淨土へ案内せんとは奇怪の一言察する處我が重病に附入り、狐狸の類が我れを迷はさんとすると思えたり、コリヤ新十郎早く弓矢を持てツ」と夢中に叫びながら突然床の上不起直つた様子に、側に居た子息新十郎は大きに驚き「父上

々々、御氣を確かに御持下さい」と云ふと、新左衛門頭を掉り「ヤア忤卑怯なり、我れ病に疲れたる處へ二十五菩薩或は三尊の彌陀と化したる狐狸の類が、我れを惑しに來つたり、ソレ弓矢を早く〜」何と制めても肯かないので、新十郎は據るなく弓矢をそれへ持つて來ると、新左衛門倏忽ちの間に弓に矢を番へ、覘ひを定めて彌陀の尊像へ一矢射てる、慥かに手答へすると同時に新左衛門弓を持つたなりそれへ仆れる、家人等は驚いて新左衛門を介抱すると同時に、矢の行方を其處此處と搜すと、邸より三十間西に當る竹藪の中で、大きな古狸が此矢を脊負つて落命してゐました、一同はこれに敬服

してゐると、新左衛門はやうやくスヤ／＼と眠たと思ふ間もなく、復び床の上にスツクと立上り「コレ皆んな御出迎ひ申さぬか、新樹庵の禪師様が御見えになつた、忤ソレ御出迎ひを早く／＼」とハツキリ物を云ふので、一同は何を云ふかと思つたが、念の爲め表の方へドヤ／＼と出て来る途端、玄關の方から「新左衛門死ぬな、今一休が參つて引導を渡すから待て居れ」といふ凜乎たる聲が聞えた、偕はと思ふと禪師は破れ法衣を被て敷臺に腰を卸し、切れた草鞋の紐を解いてお在なさる、一同益々その意外に驚き乍らも、禪師を病間へ案内する、新左衛門は手を合はして三拜すると、禪師は「コリ

ヤ新左衛門、悟道堅固の其方にも定業は限りあり、玉の緒は今切れんとす、心を鎮めて未來を悟れ」と仰有ると、新左衛門は肯いて、生れぬれば其曉に死ぬるなり

今日の夕は秋風ぞ吹く

と辭世を詠む「あゝ新左衛門感服致したぞ、流石に其方である」禪師は恁う云つて新左衛門の脊中を、トン／＼と二つ打ち「自業自得」只今より彌陀の浄土へ案内致す」と仰有つた、其言葉の切れぬに、新左衛門は莞爾笑ひ

一人来て一人で歸る我なるに

とやつた。禪師もにつこりとして新左衛門の耳に口寄せ、

道教へんと云ふぞおかしき

一人来て一人で行くも迷なり

来らず去らぬ道を教へん

「何うちや分つたか」と大きな聲で云ふと、新左はさも嬉し相にニツと笑ひ「ハ、有難き御引導、厚く御禮を申し上げます」その儘スヤ／＼と眠むるが如く往生を遂げました、新左衛門時に齡七十、その覺悟の立派なものには禪師深く嘆稱し、同時にひとく蒸騰して終ひました。

三三 腹が空いたら水を飲め

新左衛門の永眠には禪師意に深く嘆き、何となく氣も勝れずに日を暮し、新樹庵で専ら菩提を弔つて居ります、一日の事周海といふお弟子が「申上げます」「何ちや」「越前の永平寺から使僧が何か手紙を持参致しました」「ふむ、兎も角も是れへ通せ」「畏まりました」案内に連れて来たのは五十四五の僧侶で、禪師を見ると三拜九拜の禮を行います「イヤ／＼永平寺の御使僧、那樣丁寧の事をしては可かん、さあ／＼ズツと進まつしやい」「有難うございます」「汝の名は何

といふね「唯、鐵心と申します」「ハ、ア雪隠かい、汚い名だね」「禪師御申戯を……雪隠ではございませぬ、鐵心即ち鐵の心と申すのでございませぬ」「左様か、大分堅い名だね、時に永平寺の禪居にも渝る事はないか」「有難うございませぬ、大和尚には別に變りました事はございせん」「それは結構、そこで御用といふのは何ぢやね」「ハイ、それは此書面にも認めてございませうが、少々大和尚にも解らぬ事がございまして、禪師に御教導が願ひたいと存じますので」「ハ、アそれは訝しいな、禪居に解らん事が貧道に解る譯がない、併し兎も角もその書面を出して見なさい」「恐れ入ましてございませぬ」「禪師そ

れを取つて披いて見たが「何かえ禪居には是れしきの事が解らんかえ、越前の永平寺といへば三十三ヶ國の觸頭で格式の高い寺だ、その寺の住職に是れしきの事が解らんで能く生きてゐる」「へえ」「ヤツバリ是れでも物を食べたり垂れたりするかえ」「ハイ」「困つたものだ、早々還俗して鯨の鯨でも賣れと云ひなさい」「どうも恐れ入りました、併しどうも解りませぬので、わざ／＼伺ひに出ましたのでございませぬ、何か御教示を願ひたいもので」「愚を云ひなさい、這麼事は子供でも知つてゐる、故々貧道が教えるには及ばん」「へえ」「それとも達つて教えて貰ひたければ、この新樹庵へ參つて臺所で味噌でも摺

つたり、一休の肩でも敲いて修行しなさい、禪居といふ男は呆れ返つた男だ「其處を何うぞ同宗の好誼で……」成らん、教える事はできない、併し汝がそれ程に頼むなら少しお待ち」といつて手紙の裏へ何にか書いてグル／＼と巻き「さ、是れを持つて返つて禪居に御渡し、途中で汝が開けて見ると逃げて終ふよ、宜いかい」「へえ何が逃げます」「貧道の書いたものが逃げる、ダガ使僧には御苦勞、少し休息して往くが好い」「有難うございます」「腹が空つたら水でもお飲み、臺所に井がある」使僧は驚いて早々別れを告げ、件の手紙を懐中して永平寺へ歸つて來ました「大和尚只今歸りました」「大きに御

苦勞、禪師は御在になつたか「御目通りいたしました」「さうか早速御教へ下すつたらうな」「何う致しましてイヤハヤ論外でございます、禪師が傲慢におなりなすつたといふ噂は聞及びびましたが、豈夫那樣事もあるまいと心得ました處が、恁様々々で却々教えて下さいません、強つて願ひました處が此通り手紙の裏へ何か書いて下さいました「ふむ然うか、何か意味のある事と思ふ、ドレ見せなさい」披いて見ると、

風月も此世を去りし姿かな

悟りの句が記してある。永平寺の大和尚はハタと膝を打つて「うむ

面白いな「大和尚御解りになりましたか」「イ、ヤ字は解らん、併し流石に禪師だ、野衲も久しく御目に掛らんから、故とこの禪居を慍らして、分らぬ字があるなら手紙など遣さずに自身遊び乍ら尋ねに參れと恚ういふ意だ、此句で野衲を釣寄せやうといふのだ、イヤ才氣のある方は違つたものだ、野衲も往きたい、往つて久々で御目にかゝりたい雖然釣寄せられて往くのは残念ぢや、まア能い捨て、置かう」狸と狸の睨み合ひが却々面白い。

三四 眞つ暗な處が十萬億土

處が茲に偶と問答の種が出来た。ト云ふのは、永平寺の寺中恭藏院の檀家に紙問屋七郎次といふ者があつて、手廣く商ひをする、其伴の庄藏が親孝行の評判者、然るに七郎次は七十四歳で病死すると、伴の庄藏が氣が狂ふ許りに悲嘆の涙に暮れ、父の遺骸に抱き附いて葬式をする事も知りません、幾ら異見しても肯かない、恭藏院も是れには弱つて永平寺の大和尚禪居へ諭し方を申入れました。禪居も庄藏を不便に思つて様々に諭し、辛く親父の死骸から引離して葬ひだけは濟ませたが、商賣も勿論三度の物も食はずに親父に遇ひたいと云ひ暮してゐる、禪居もホト／＼困じた末に偶と一策を案じ